

菊鹿町文化財調査報告 第5集

ひ くち
樋ノ口遺跡

1 9 9 9 年

か もとぐんきく か まち
熊本県鹿本郡菊鹿町教育委員会

菊鹿町文化財調査報告 第5集

ひ くち
樋ノ口遺跡

1 9 9 9 年

か もとぐんきく か まち
熊本県鹿本郡菊鹿町教育委員会

序 文

菊鹿町では、この度、大林地区の圃場整備事業に伴う発掘調査を実施しました。事前調査を県に依頼し、試掘を行いましたところ、古代の竪穴住居址が検出されたとの回答がございました。この部分については、本調査の必要があるとのことで、遺構保存のために、設計変更に努めましたが、どうしても記録保存に留めざるを得ない550㎡の区画が生じたので、町教委では、調査体制を整え、平成11年の年明けから、年度末の3月上旬まで、発掘調査を実施しました。

この間、水上 仁(囑託)が、精力的に調査に従事しましたが、県文化課の方々から暖かい御指導を受け、無事、期間内に終了することができました。

本報告書が、埋蔵文化財の保護と研究に役立てば幸いに存じます。お世話いただきました多くの関係者の皆様に、厚くお礼を申し上げます。

平成11年3月31日

菊鹿町教育長 平 嶋 靖 弘

目 次

第Ⅰ章 調査の概要	1
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査の組織	1
3. 菊鹿町の概要	1
4. 大林集落の概要	1
5. 歴史的環境	2
6. 調査の概要	5
第Ⅱ章 調査の成果	7
第1節 A調査区	7
1. 確認遺構	10
2. 基本土層	10
3. 遺 構	10
SI(01)	10
SI(02)・SI(03)	11
SD(01)・SD(02)	12
SB(01)	12
SA(01)・SA(02)	13
SK(01)・SK(02)・SK(03)・SK(04)	13
第2節 B・C・D調査区	14
1. 確認遺構	14
2. 基本土層	14
3. 遺 構	15
SW(01)	15
第Ⅲ章 出土遺物	17
第Ⅳ章 ま と め	30

挿 図 目 次

第1図 菊鹿町遺跡分布図(抜粋)	3	第8図 SI(01)実測図	10
第2図 菊鹿町位置図	3	第9図 SI(02)実測図	11
第3図 樋ノ口遺跡周辺地形図	5	第10図 SI(03)実測図	11
第4図 調査区グリッド設定図	6	第11図 SB(01)実測図	12
第5図 A調査区実測図①	7	第12図 SA(01)実測図	13
第6図 A調査区実測図②	8	第13図 SA(02)実測図	13
第7図 A調査区実測図③	9	第14図 SK(02)実測図	14

第15図	B・C・D調査区実測図	15	第20図	出土遺物実測図③	23
第16図	q－r土層断面実測図	15	第21図	出土遺物実測図④	25
第17図	q－s土層断面実測図	15	第22図	出土遺物実測図⑤	27
第18図	出土遺物実測図①	18	第23図	出土遺物実測図⑥	28
第19図	出土遺物実測図②	21			

表 目 次

第1表	遺跡一覧表(抜粋)	3	第6表	出土遺物観察表②	20
第2表	A調査区基本土層表	10	第7表	出土遺物観察表③	22
第3表	B調査区基本土層表	14	第8表	出土遺物観察表④	24
第4表	土層観察表	15	第9表	出土遺物観察表⑤	26
第5表	出土遺物観察表①	19	第10表	出土遺物観察表⑥	29

写 真 図 版

図版1	A調査区・SI(01) 南→北	図版4	C調査区・t－u土層断面 北西→南東
図版2	A調査区・SB(01)・SA(02) 東→西	図版5	出土遺物
図版3	C調査区・水溜め遺構 南東→北西	図版6	出土遺物

例 言

1. 本書は、熊本県鹿本郡菊鹿町大字松尾字樋ノ口に所在する遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、大林地区の圃場整備事業として、菊鹿町が実施した。
3. 出土遺物は、菊鹿町教育委員会で保管している。
4. 本書の執筆と編集は、水上 仁が行なった。

第Ⅰ章 調査の概要

1. 調査にいたる経緯

菊鹿町では、大林地区の圃場整備事業に先立ち、県文化課に試掘調査を依頼した。平成10年4月に、県文化課の手によって試掘が実施されたが、その結果、字樋ノ口の畑地から竪穴住居址が確認された。そこで、菊鹿町は、平成11年1月4日より3月3日まで、本調査を実施した。調査面積は、約550㎡であった。

2. 調査の組織

調査主体	菊鹿町教育委員会
調査責任者	平嶋靖弘（教育長）
調査担当	水上 仁（社会教育課嘱託）
調査事務	岩井賢太（社会教育課長） 富田弘海（社会教育課係長） 飯川康秀（社会教育課主査）
調査指導	高木正文（県文化課参事） 後藤貴美子（県文化課文化財保護主事）
調査助言	島津義昭（県文化課課長補佐） 松本健郎（県文化課課長補佐） 大田幸博（県文化課主幹） 西住欣一郎（県文化課参事） 園村辰実（県文化課参事）
試掘調査	古城史雄（県文化課参事） 古閑敬武（県文化課嘱託）

3. 菊鹿町の概要

菊鹿町は、熊本県の北端部に位置し、北東部は国見山（標高993.8m）の稜線を境として、福岡県（矢部村）と大分県（中津江村）に接する。行政境は、北西に鹿北町、西に山鹿市、南に鹿本町、東に菊池市。行政域は、東西10.9km、南北12.6kmで、北から南に逆三角形状を呈し、総面積77.38km²。大字下内田713番地の町役場は、東経130° 46' 17"、北緯33° 1' 31"にある。

町の東部から北部にかけて、八方ヶ岳、三国山、国見山等の標高1,000m級の高山が連なる。これらの山地から枝状に流れ出る小支流がまとまって、上内田川となっている。町内は、八方ヶ岳山頂が最高所で、標高1051.8m。最低は、木野川と豊水川の合流点で、標高39m。町内の基本地形は、東部、北部、西部が分水嶺で囲まれ、南部が菊鹿盆地となっている。菊池市堀切にかかる鞠智城跡の米原台地が、地形の一大変化点で、南下に広大な菊池平野を望む。

樋ノ口遺跡（標高75m）は、大林集落にあり、町内を貫く県道（菊池～鹿北線）と初田川との間にある。一帯には、斜面を開墾した小区割りの畑地と水田が広がる。

4. 大林集落の概要

大字松尾地内の集落で、町内の南東側に位置する。ここは、八方ヶ岳から南々西に延びる尾根の西斜面域にあたり、初田川の上流域でもある。東は尾根を境に白木地区（菊池市）、西は道場・木山両地区、南は稗方地区（菊池市）・米原地区、北は池田・酒造野両地区と接する。寛文九年（1669）の『国郡一統志』に「大林大隅大明神」とある。明治9年に、近隣地が合併して松尾村の一部になった。その後、明治22年から現在まで、大字松尾地内の一集落となっている。

5. 歴史的環境

①旧石器時代

米原地区の鞠智城跡(1:右図中番号、以下同じ)から、後期旧石器時代のナイフ型石器が出土している。石材は、緻密なサヌカイト。

②縄文時代 参考文献:『菊鹿町史』

鞠智城跡(1)からは、縄文早期～晩期の土器も出土した。山内地区の天の岩戸岩陰遺跡(2)からは、縄文前期～晩期の土器が数多く出土した。同時に石器や貝輪・骨角器・鉄器・玉類等も出土した。長谷川地区の水田からは、石斧と磨石が表採されている。

③弥生時代

鞠智城跡(1)からは、後期の免田式土器が出土した。天の岩戸岩陰遺跡(2)では、中期の黒髪式土器と、後期の野辺田式土器が出土している。鹿本町の津袋遺跡(4)は、後期の大集落遺跡であるが、その範囲は、菊鹿町の内田川左岸一帯まで、拡大することが確実である。

④古墳時代

朱塚古墳(5)は下内田地区にあり、内田川の段丘に立地する。円墳で、主体部は、堅穴式石室。徳塚古墳(6)は、菊鹿中学校の校庭造成工事の際に消滅した。銭亀塚古墳群(7)は、木野字銭瓶塚にある。三基の円墳が並び、南端のものを銭亀塚と称する。近くの崖面に、9基の横穴が残るスズメ迫横穴群(8)がある。さらに龍徳鬼の竈古墳(9)もある。尾迫古墳(10)は、木野地区にあり、主体部は、単室の横穴式石室。築造年代は、6世紀前半から中葉。灰塚古墳(11)は、池永地区にあったが、圃場整備事業により、記録保存となった。調査によって、石蓋土坑墓と木棺墓が検出された。円墳で、築造年代は、5世紀初頭と推定される。陣の内古墳(12)は、下永野字田中にある。小円墳で、主体部は、横穴式石室。穴天神と呼ばれ、町指定文化財。下永野陣の竈古墳(13)は、下永野字田中にある。築造年代は、6世紀後半。今山箱式石棺(14)は、下永野地区の六郷小学校付近から出土した。箱式石棺と家形石棺が検出されている。黄金塚古墳(15)は、松尾字金塚にある。円墳で、主体部は横穴式石室。6世紀後半頃の築造と考えられる。

⑤古代 参考文献:『鞠智城跡』熊本県文化財調査報告

N30°Wの条里地割(16)が、内田川流域の水田地帯に残っている。条里の南西端にあたる鹿本町庄に「三六」、さらに庄井出に「口の坪の堰」。町内では、島田地区の内田川・谷口に「三十六橋」の関連地名が残る。三六は、条里線の方向が異なる来民・御宇田条里との境にあたる。

米原地区の鞠智城跡(1)は、県内唯一の古代山城である。中心部の城域は、55haの広さがあり、県によって、整備と調査が継続的に実施されている。調査は、20次を数え、主な出土遺物に、百済系蓮華文(八葉単弁)軒丸瓦、「秦人忍口五斗」と墨書された木簡と農具等の木製品などがある。検出された建物跡は、67棟を数え、八角形建物(鼓楼)、米倉、兵舎、武器庫、管理棟建物、寝殿風建物などに細分される。平成6年度から、大規模な歴史公園化が進められている。

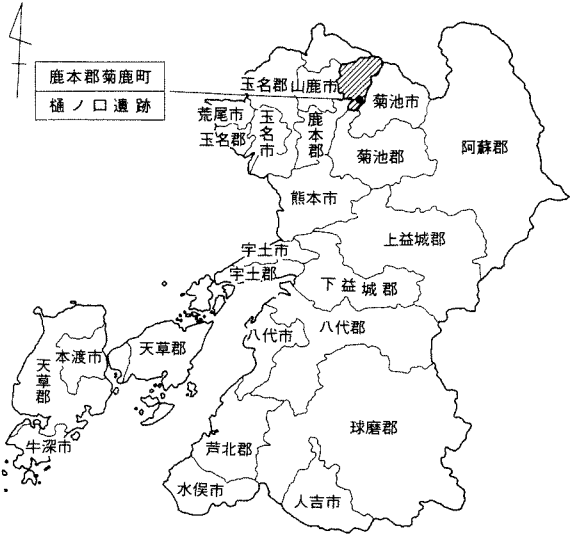
⑥中世 参考文献:『若宮城跡』熊本県文化財調査報告

川西地区の丘に若宮城跡(25)がある。主な遺物は、12～13世紀の白磁である。外に時代の下る遺物は、全く出土していない。麓には、鎌倉時代の「正和年号」が刻まれた大型の宝篋印塔がある。近くからは、胡州鏡も出土している。発掘調査によって確認された県内最古の中世城である。

菊鹿の地は、戦国時代に隈部氏の拠点となった。その関連もあって、町内には計10城の中世城が存在する。本拠地は隈部館(21)で、上永野地区の山中に礎石建物跡や庭園が残っている。館背後の高山には猿返城(20)、米の山城(19)などの砦がある。隈部親永は、永禄2年(1559)に赤星道雲を合勢川の戦いで破っている。



第 1 図 菊鹿町遺跡分布図



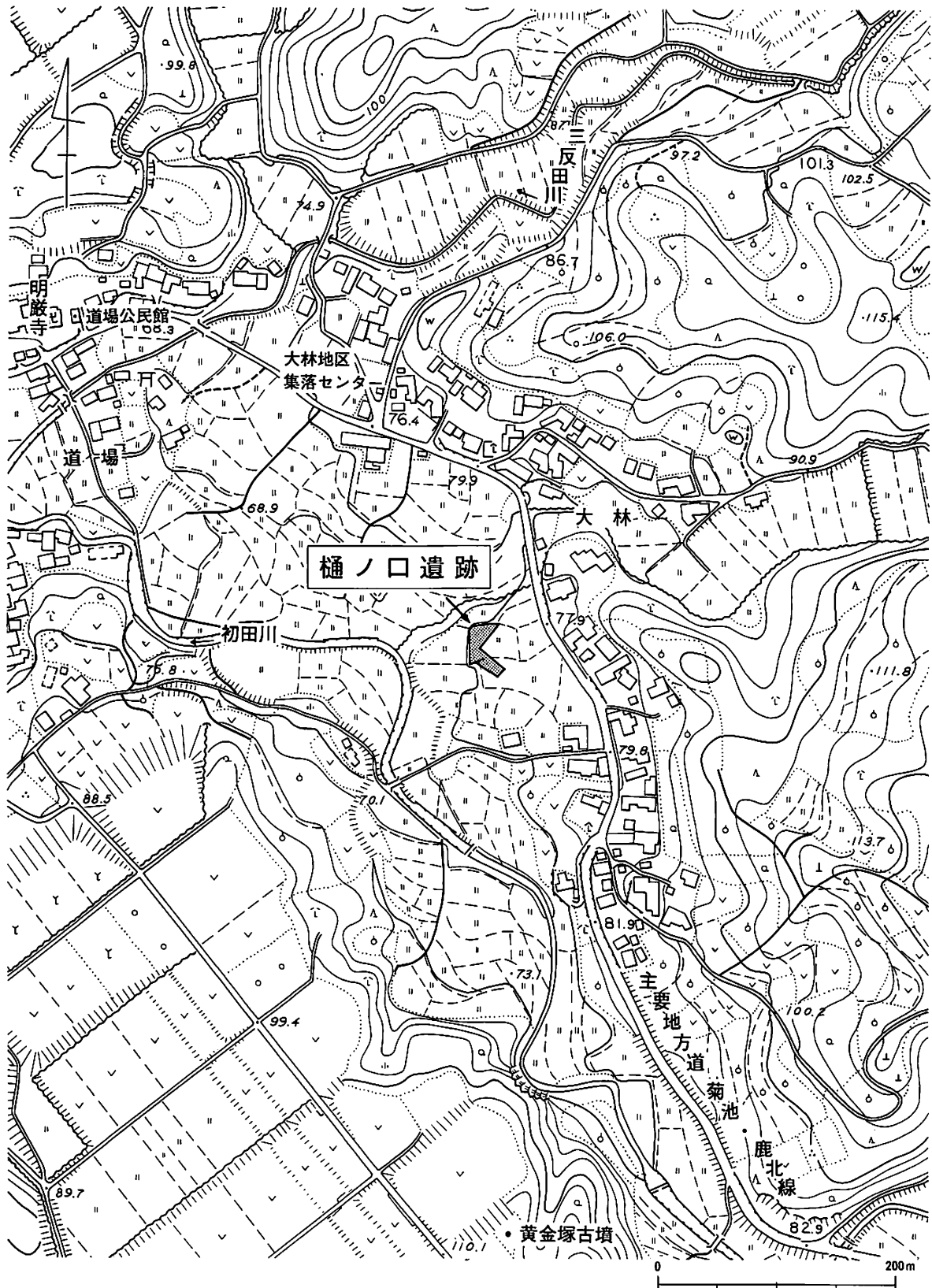
第 2 図 菊鹿町位置図

番号	遺 跡 名	所 在 地	時 代
1	鞠智城跡	米原 長者原	旧石器 縄文 弥生 古代山城
2	天の岩戸岩陰遺跡	山内 鶴次郎	縄文・弥生
3	長谷川地区	長 長谷川	縄文
4	津袋遺跡（鹿本町）	津袋 本村	弥生
5	朱塚古墳	下内田 立山	古墳
6	徳塚古墳	下内田 上島田・下島田	古墳
7	銭亀塚古墳群	木野 銭瓶塚	古墳
8	スズメ迫横穴群	下永野	古墳
9	龍徳鬼の竈古墳	松尾 龍徳	古墳
10	尾迫古墳	木野 尾迫	古墳
11	灰塚古墳	池永	古墳
12	陣の内古墳	下永野 田中	古墳
13	下永野陣の竈古墳	下永野 田中	古墳
14	今山箱式石棺	下永野 辺田目	古墳
15	黄金塚古墳	松尾 金塚	古墳
16	条理地割	鹿本町 庄	古代
17	鶴巣城跡	上内田 深瀬	中世
18	山内城跡	山内 郷の原	中世
19	米の山城跡	上永野	中世
20	猿返城跡	上永野	中世
21	隈部館跡	上永野 高地	中世
22	阿佐古城跡	阿佐古	中世
23	鷹取城跡	太田 鷹取	中世
24	日渡城跡	下内田 上日渡	中世
25	若宮城跡	下内田 若宮	中世
26	山ノ井城跡	下内田 山の井	中世
27	木野城跡	木野	中世
28	虎口城跡(菊池市)	菊池市 龍門	中世

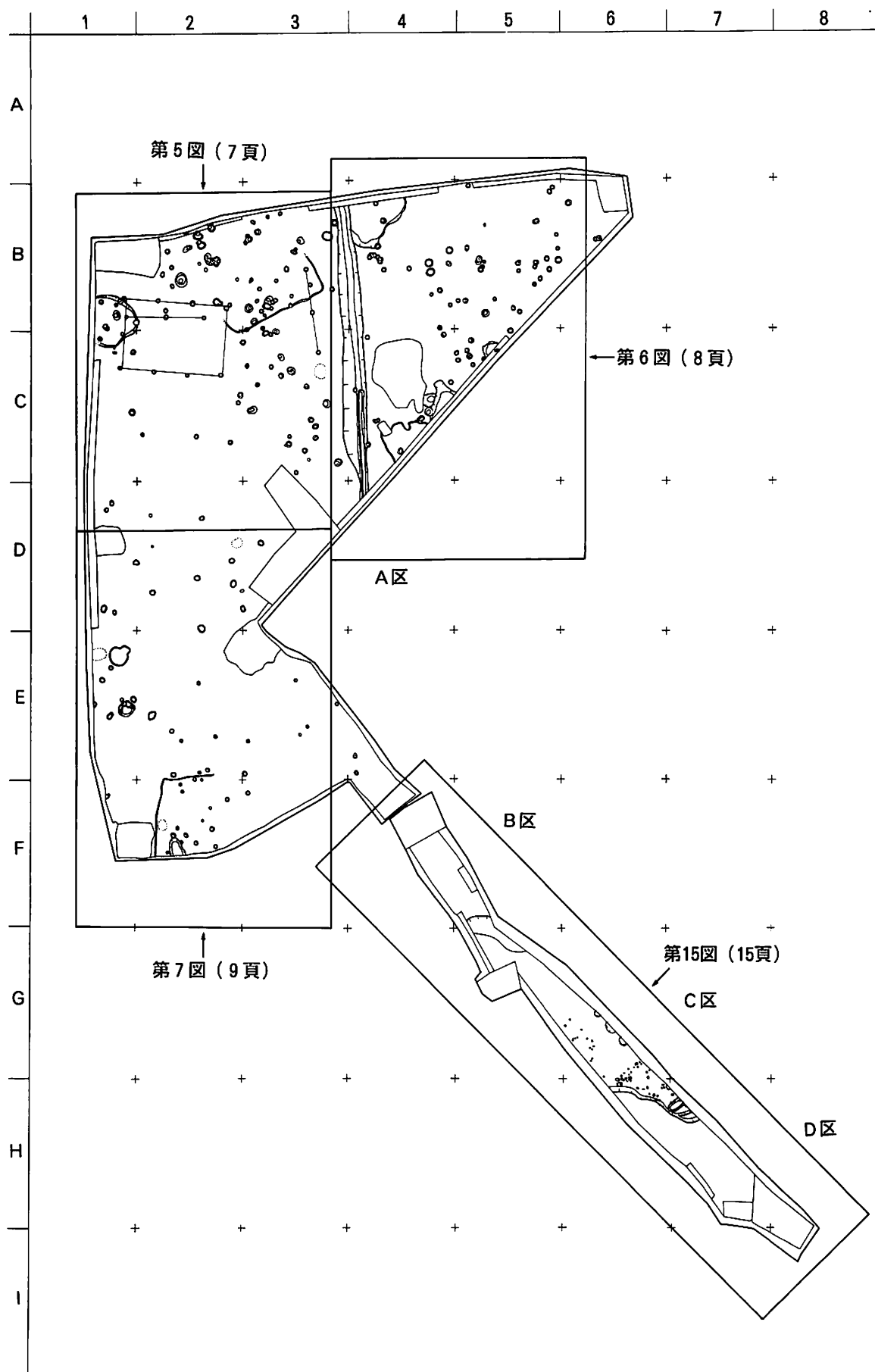
第 1 表 遺跡一覧表（抜粋）

6. 調査の概要

A区は畑地で、面積約500㎡。圃場整備事業によって、幹線水路と支線道路が整備される区域である。土層観察用のトレンチ(7箇所)を設定した。B・C・D区は、水田で、面積約50㎡。段状地形で、畦畔によって三分され、BからDへ順に高くなる。各比高差は、約1m。



第3図 樋ノ口遺跡周辺地形図

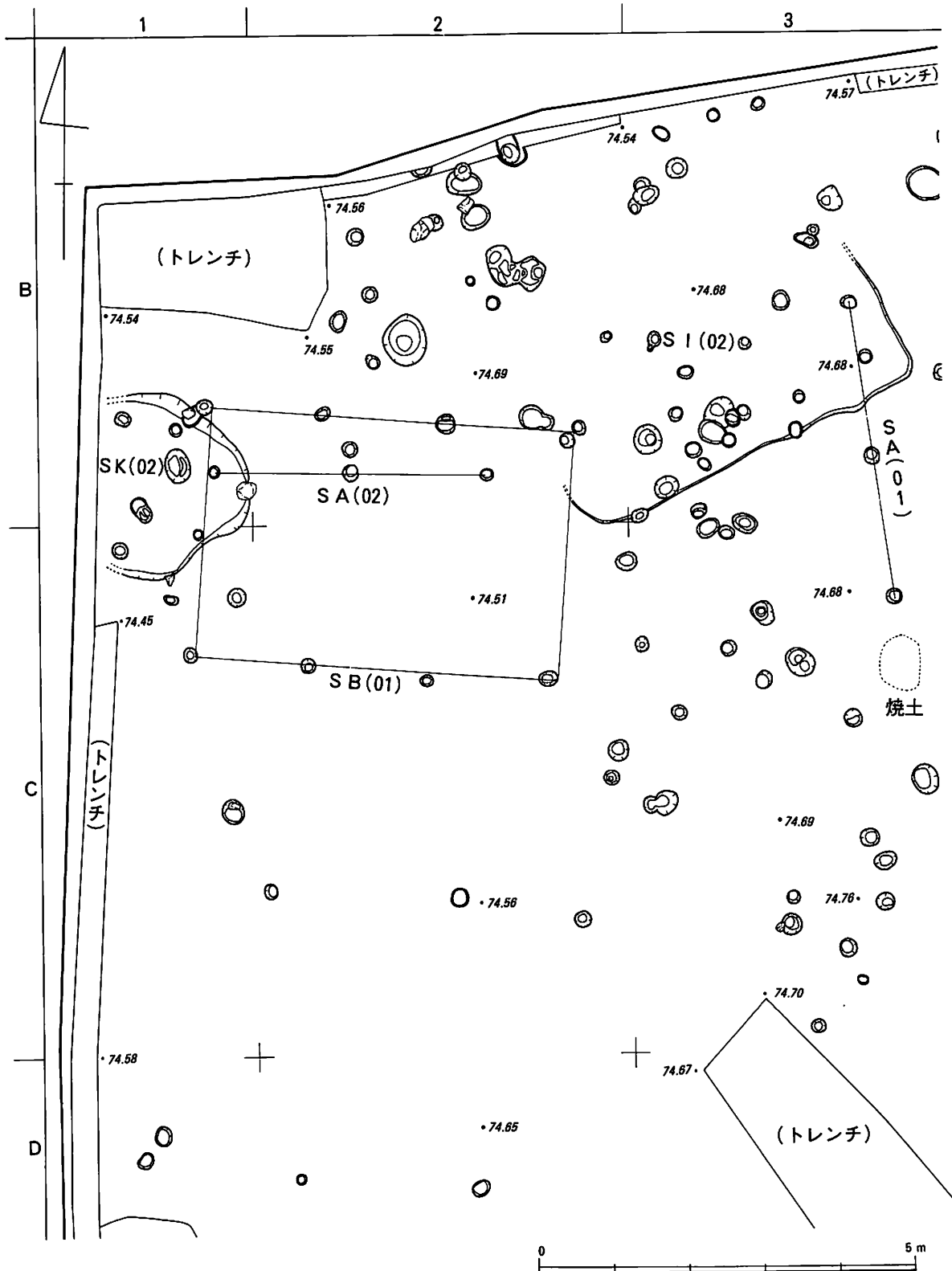


第4図 調査区グリッド設定図

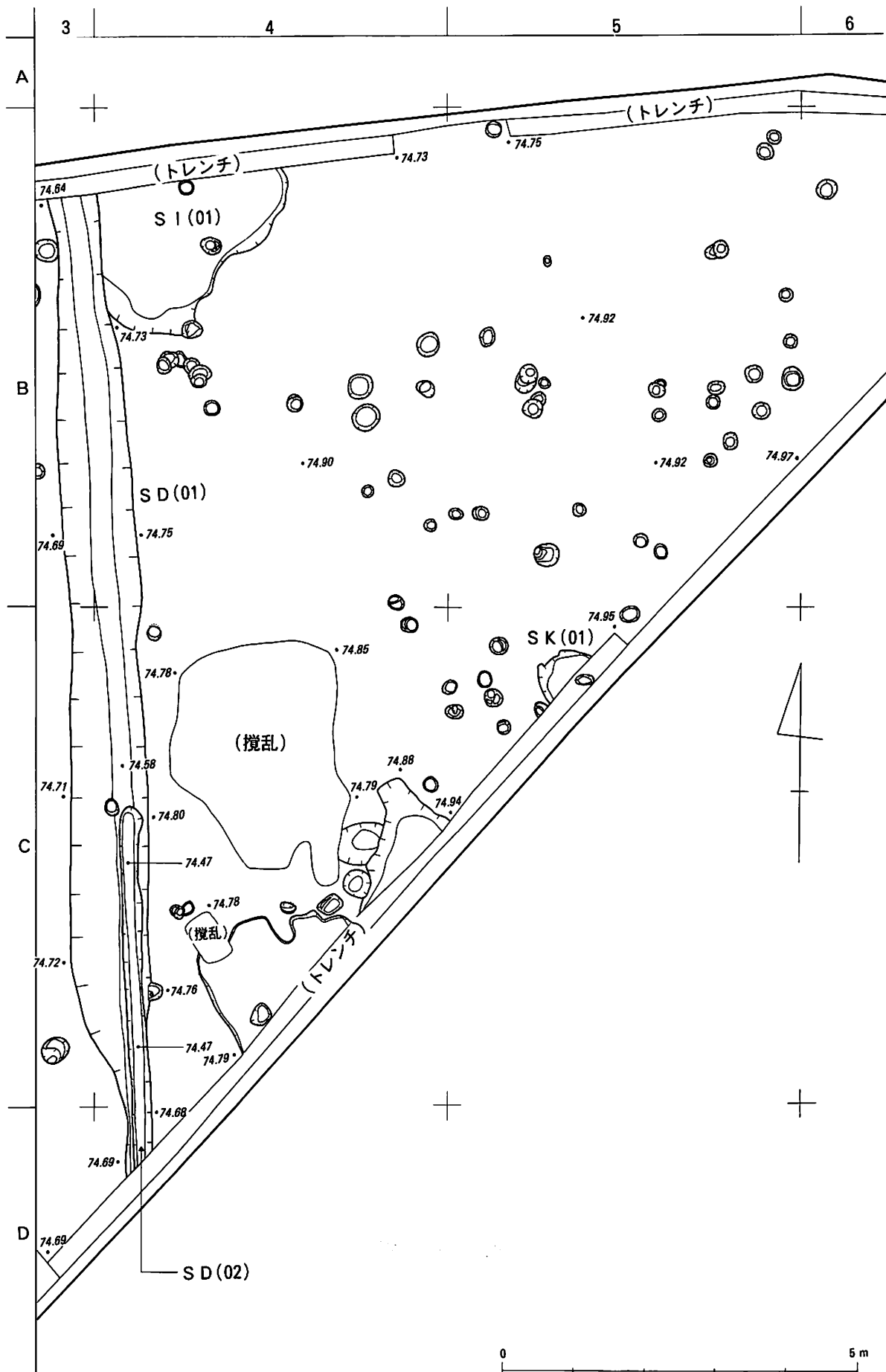
第Ⅱ章 調査の成果

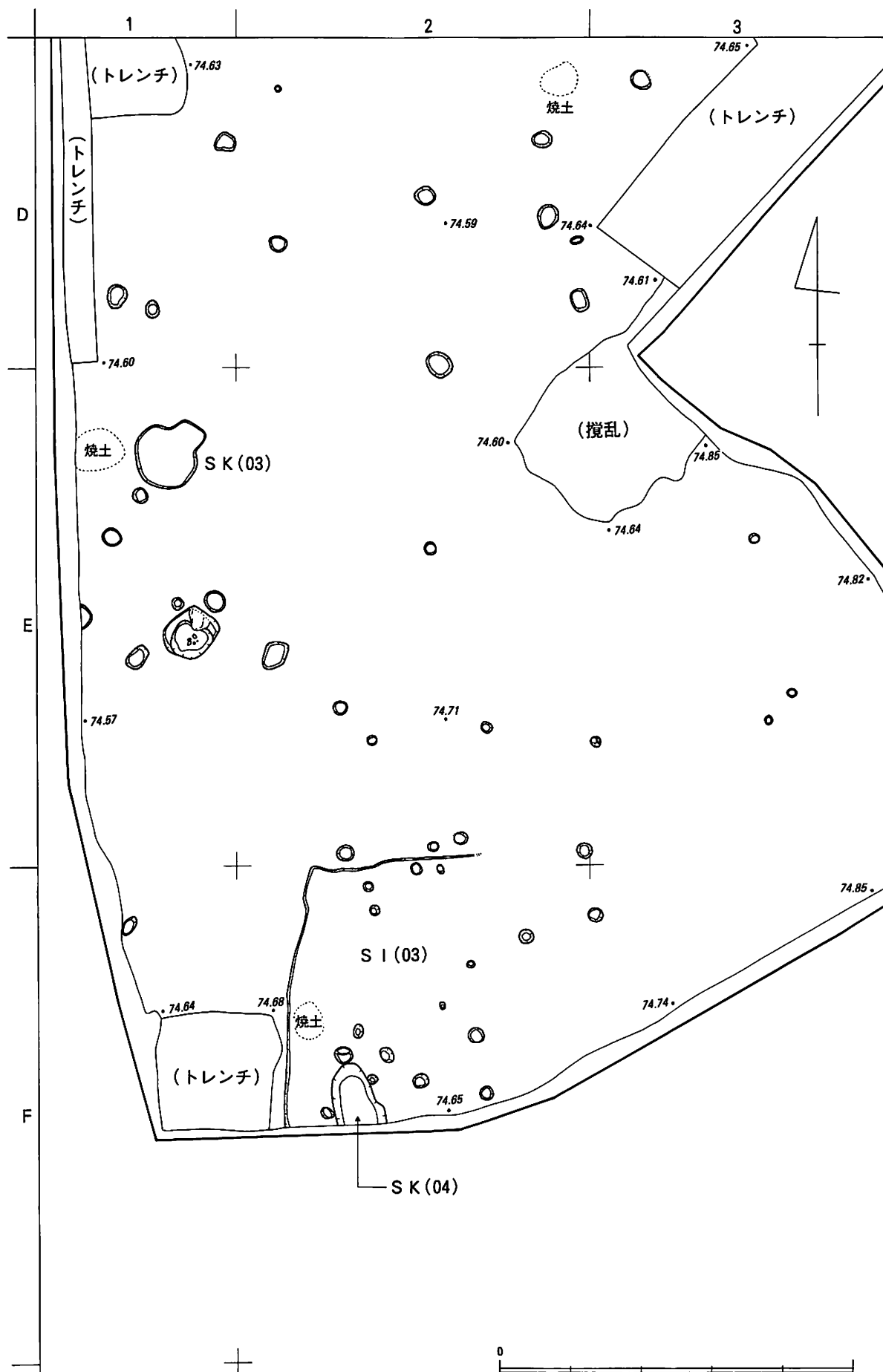
第1節 A調査区

遺構検出面は、標高74.5m前後で、ほぼ平坦地形である。大幅に削平されており、遺構の残りは、良くない。遺物の出土も、極少量である。遺構に伴う場合も、細片が多かった。



第5図 A調査区実測図①





第7図 A調査区実測図③

1. 確認遺構

竪穴住居址 (S I) → 3 基 掘立柱建物跡 (S B) → 1 棟 土 坑 (S K) → 4 基
 溝 状 遺 構 (S D) → 2 条 柵 列 (S A) → 2 列 柱 穴 (S P) → 多数

2. 基本土層

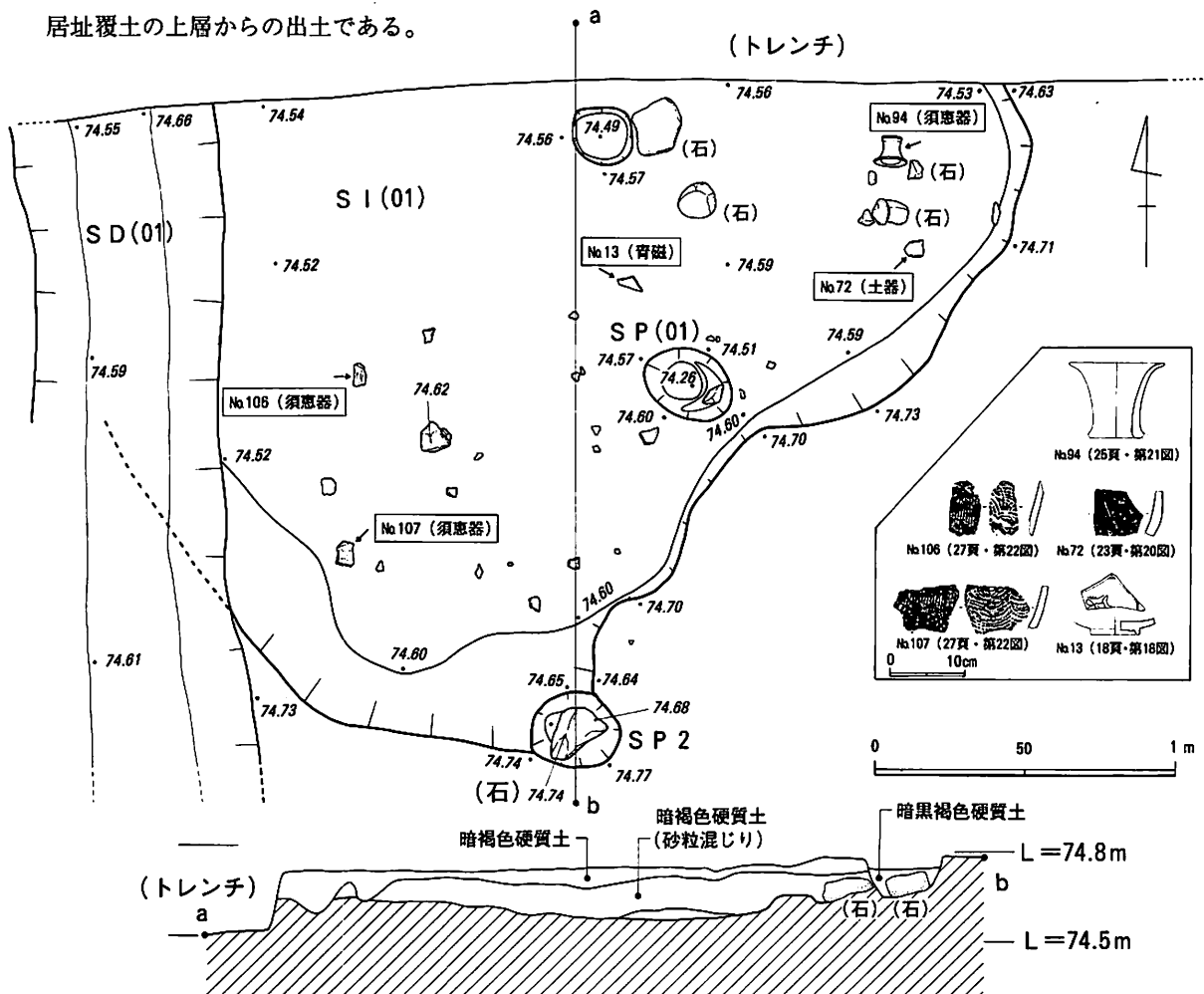
層序	土 壤	層 厚	性 格
I	暗褐色軟質土	35～40cm	耕作土
I-1	暗褐色硬質土	15～25cm	砂粒が多量に混入。耕作土の床土。遺物が混入する。
II	白灰色粘質土	5～25cm	遺構検出面。調査区の西側で、薄層となる。
III	砂礫土	5～55cm	無遺物層。調査区の南西側で厚層となる。
IV	明黄灰軟質土	25～55cm	無遺物層。ローム層土。

第2表 A調査区基本土層表

3. 遺 構

S I (0 1)

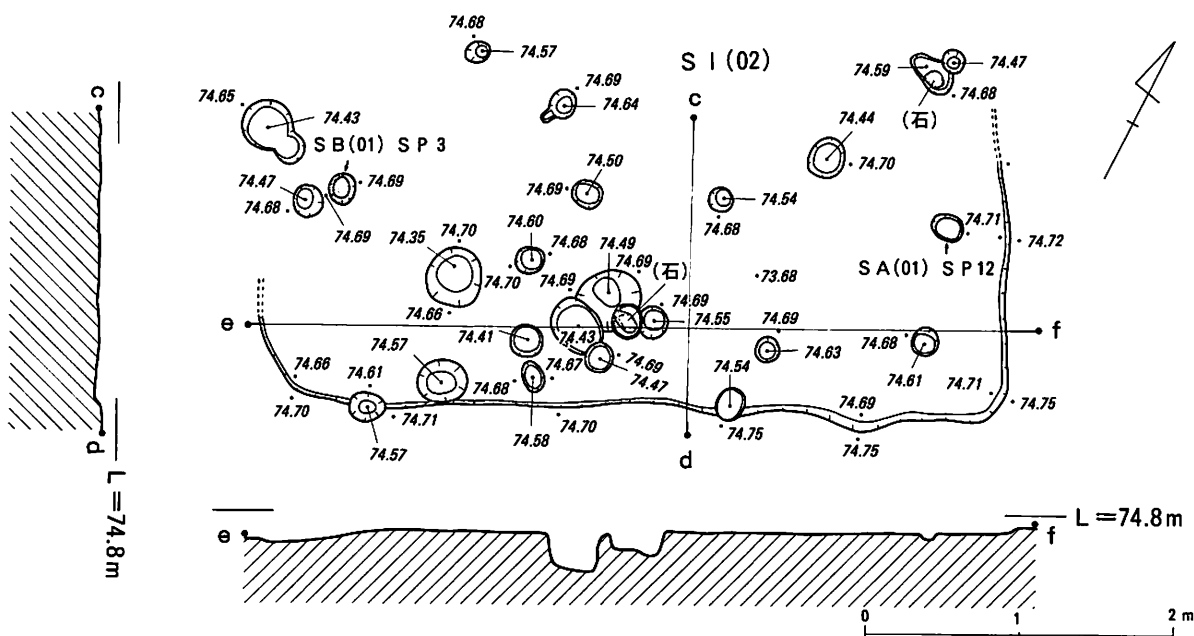
B-4 から検出された 7 世紀代の小規模住居址。遺構の北側は、調査区外に延びて、西側は、S D (0 1) に切られている。歪な隅丸方形のプランで、一辺は、3 m 前後。須恵器の壺の頸部・土師器・須恵器の小片が出土した。壁高は 17 cm、3 個の柱穴の中で、住居址関係の柱穴は、S P 1 のみ。この柱穴は、住居址の覆土を掘り下げて確認できた。住居址を切る S P 2 には、根石が入っている。図中に記された青磁 (No. 13) は住居址覆土の上層からの出土である。



第8図 S I (0 1) 実測図

SI(02)

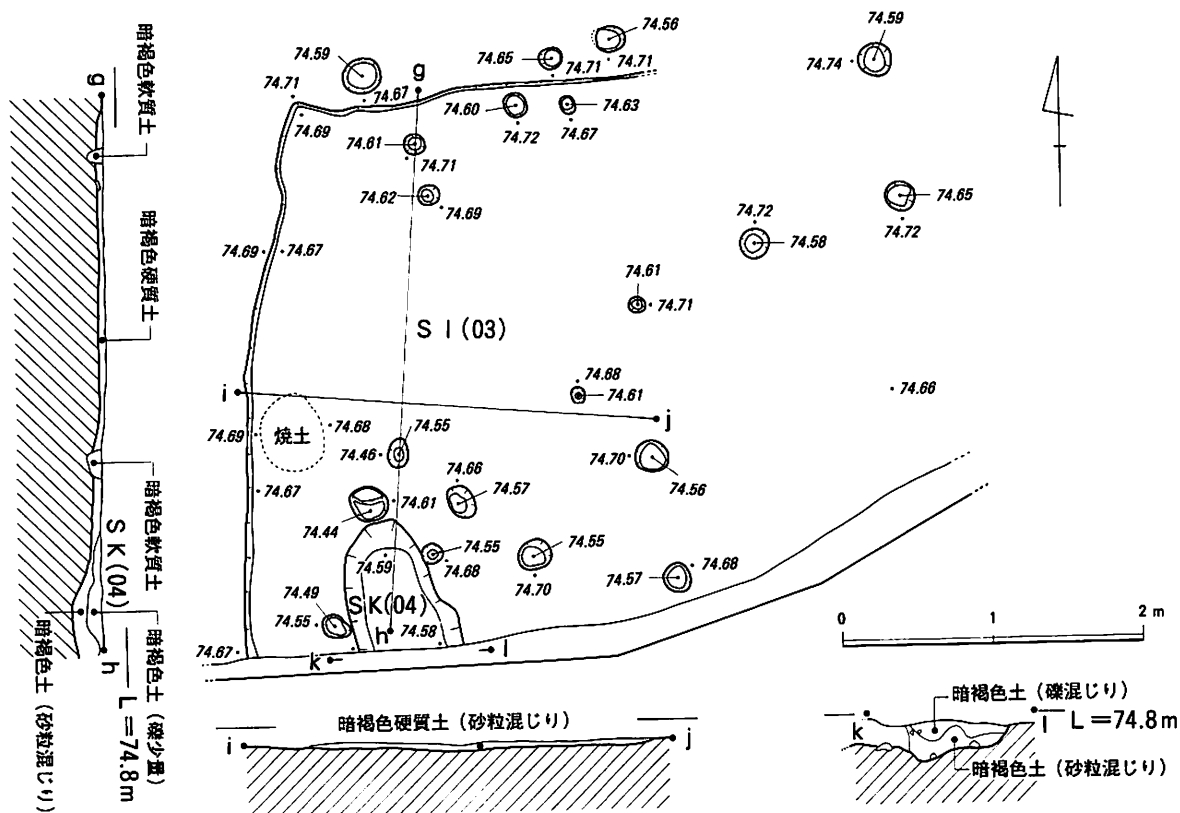
B-2・3から検出された。方形プランの竪穴住居址で、長軸の向きは、E31°N。一辺の長さは5m。耕作による削平が目立ち、残存の壁高は、僅か3～5cmに過ぎない。南側一部の検出に留まった。



第9図 SI(02)実測図

SI(03)

F-2から検出された。方形プランの竪穴住居址で、東側は、削り取られている。残存の長さは、南北で3.7m、東西で2.3m。南端でSK(04)が切っている。



第10図 SI(03)実測図

SK(04) 断面図

SD(01)

E 5° Wの向きで、B・C・D-3・4にかかる。長さ14m、幅0.7~1.0m、深さ15cm。南北両側は、調査区外に延びる。断面形状は、皿状を呈するが、東壁は、やや鋭く掘り込まれ、西壁は、極く浅い掘り込みに留まる。粘土や砂礫の堆積は見られない。

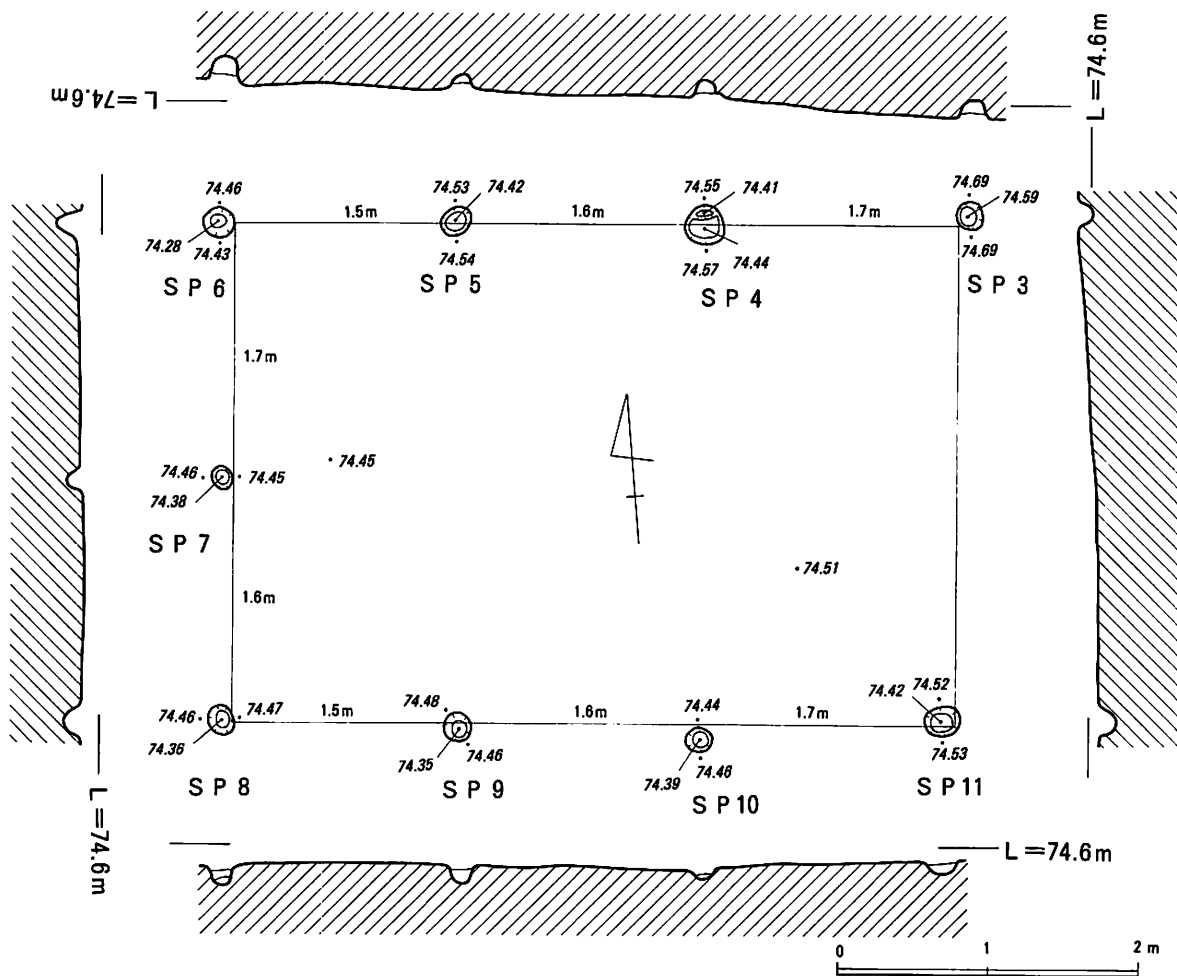
SD(02)

SD(01)を東側で切る小溝。さらに東側の調査区外へ延びている。長さ4m、幅25cm、深さ20cm。埋土の下部には、礫や砂質土が多量に混入しており、明らかに水路である。

SB(01)

B・C-1・2から検出された。3間×2間で、桁行4.8m、梁行3.3m。側柱のみの建物で、桁行方向はE 3° S。桁行の柱間寸法は、北側のSP 3~6で、1.7m+1.6m+1.5m。南側のSP 8~11も同間隔。柱筋については、南側のSP 10のみが10cm程、外側にずれる。

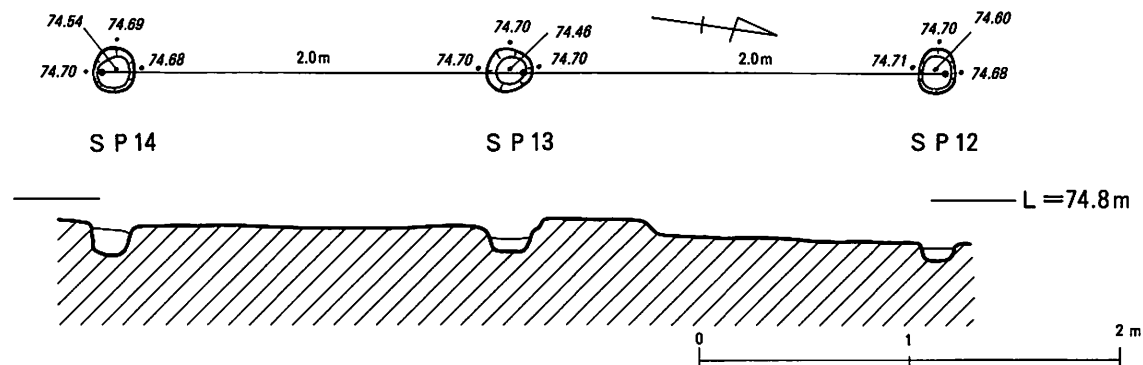
梁行は、西側のSP 6~8で1.7m+1.6m。東側のSP 3~11は、中柱が無く、3.3m。入口は、こちらであろう。柱穴は、直径10~28cm、深さ5~12cm。柱底のレベル差は、SP 3~6で25cm、SP 8~11で10cm。西側へ傾斜している。柱痕は、確認できなかった。柱は抜き取られたのであろう。SP 4から、土師器の細片が出土した。



第11図 SB(01)実測図

SA(01)

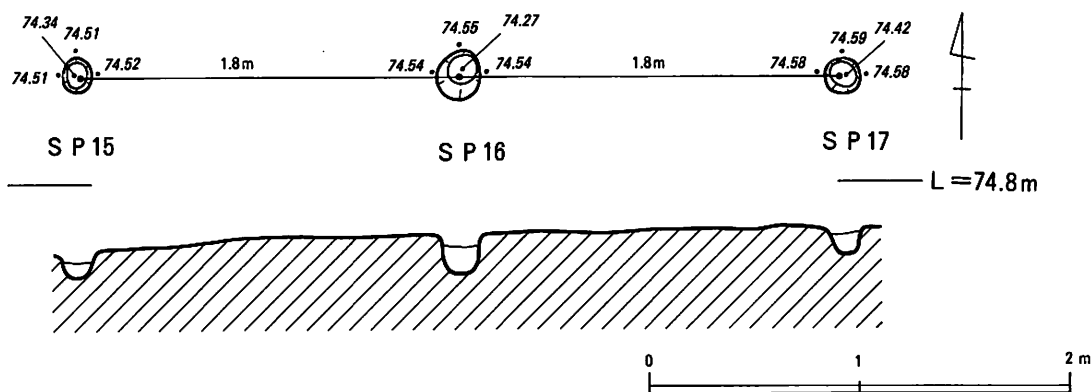
B・C-3から検出された3個の柱穴の並びで、長さ4.0m。柱間は、SP12~14で、2.0mの等間隔、向きはN9°W。SB(01)と距離的に近いが、並列せず、建物との関連は薄い。柱穴は、直径17~20cm、深さ8.0~15.0cm。柱底のレベルは、ほぼ一定。SP12は、SI(02)の東側を切っている。



第12図 SA(01)実測図

SA(02)

B・C-1・2から検出された。SA(01)と同じ性格の柱列である。SB(01)との前後関係は不明。長さ3.6m、柱間は、SP15~17で1.8mの等間隔。SB(01)の柱筋(桁行)とは、並列しない。柱穴は、いずれも同じ大きさで、直径17cm、深さ10~18cm。柱底のレベル差は10cmで、西側へ傾斜している。



第13図 SA(02)実測図

SK(01)

C-5から検出された。一部は、調査区外に延びる。検出部分のプランは円形状を呈し、長軸1.2m、深さ26cm。埋土色は、褐色硬質土。

SK(02)

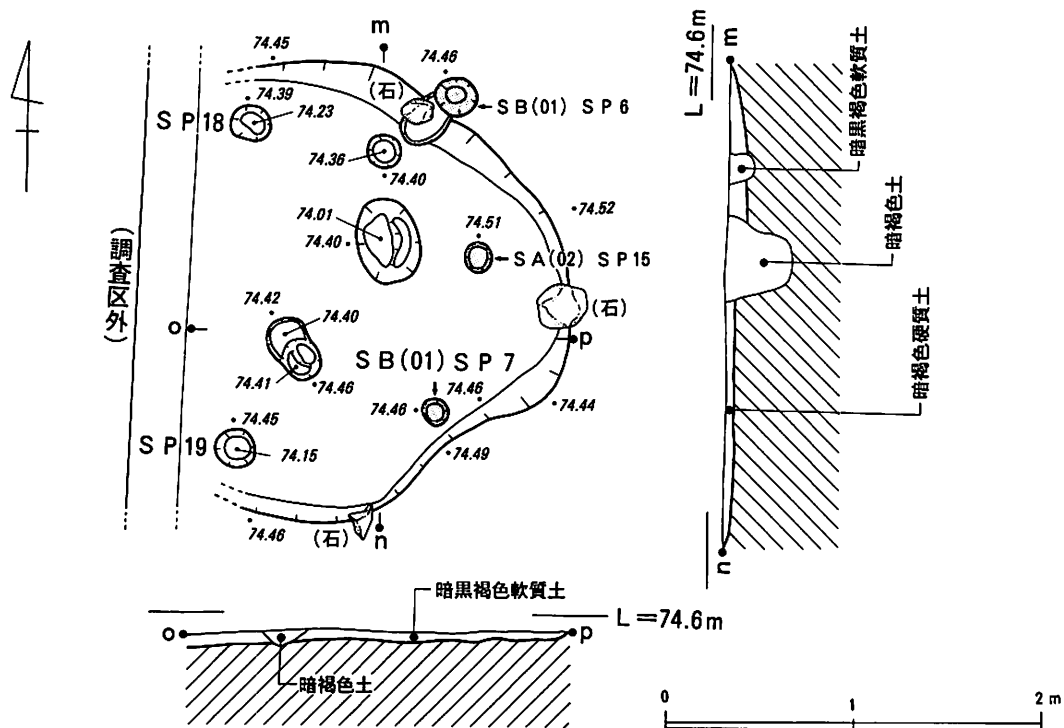
B・C-1から検出された。遺構の三分の一(西側)は、調査区外となる。南北の長さ2.6m、深さ5.0~10cm。北側が深掘りされている。遺構に関係ある柱穴は、SP18・SP19。SP18は深さ17cm、SP19は直径20cm、深さ28cm。埋土には、赤褐色の硬質土粒(3.0~5.0cm大)が、多量に混入している。

SK(03)

E-1から検出された。円形プランで、北東側部分に方形の突起箇所がある。長軸1.1m、短軸0.9m、深さ5.0cm。底部は、ほとんど平坦。

SK(04)

F-2から検出された。南側部分は、調査区外に延びる。プランは、楕円形。長軸80cm、短軸60cm、深さ20cm。SI(03)を切り込んでいる。



第14図 SK(02)実測図

第2節 B・C・D調査区

C区における遺構検出面は、標高73.3m前後。全体として、幅1.5m、長さ28mの調査区を形成し、A調査区の南東側に位置する。それぞれ1.0mの段差がある段状地形で、3区画に細分される。検出された水溜め遺構から、流れ込みの遺物が、数多く出土した。

1. 確認遺構

水溜め遺構(SW)→1基

2. 基本土層

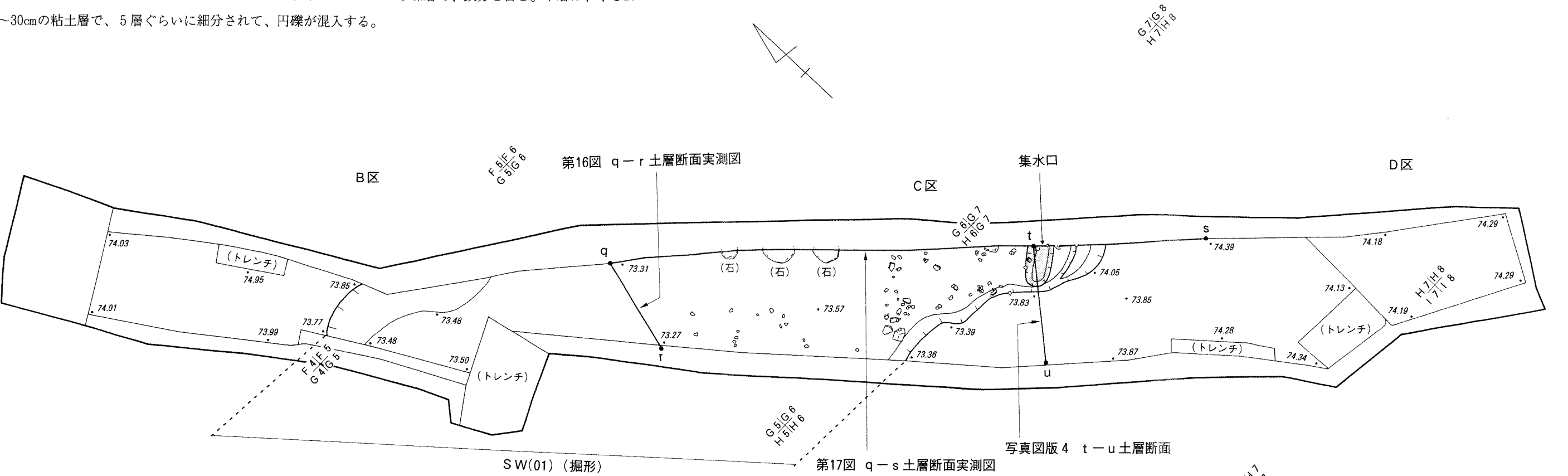
層序	土 壤	層 厚	性 格
I-1	灰色粘質土	15~35cm	水田
I-2	灰色軟質土	5~8cm	水田の床土の漸移層
I-3	灰褐色硬質土	10~22cm	水田床土
II	灰褐色土	6~120cm	互層造成土。流れ込み遺物の包含層。
III	青灰色軟質土	5~50cm	旧水田。流れ込み遺物は、磨滅状態。
III-1	暗赤褐色土	1~10cm	旧水田の床土。
IV	灰色砂質土	5~20cm	C調査区での遺構検出面。鉄分と礫の混入が見られる。
V	淡灰白色軟質土	15~30cm	B調査区での遺構検出面。
VI	砂礫土	20~30cm	無遺物層。

第3表 B調査区基本土層表

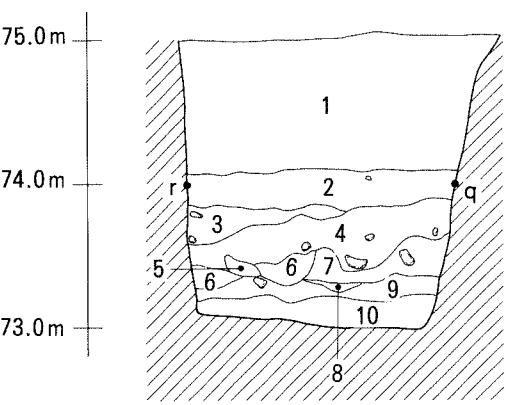
3. 遺構

SW(01)

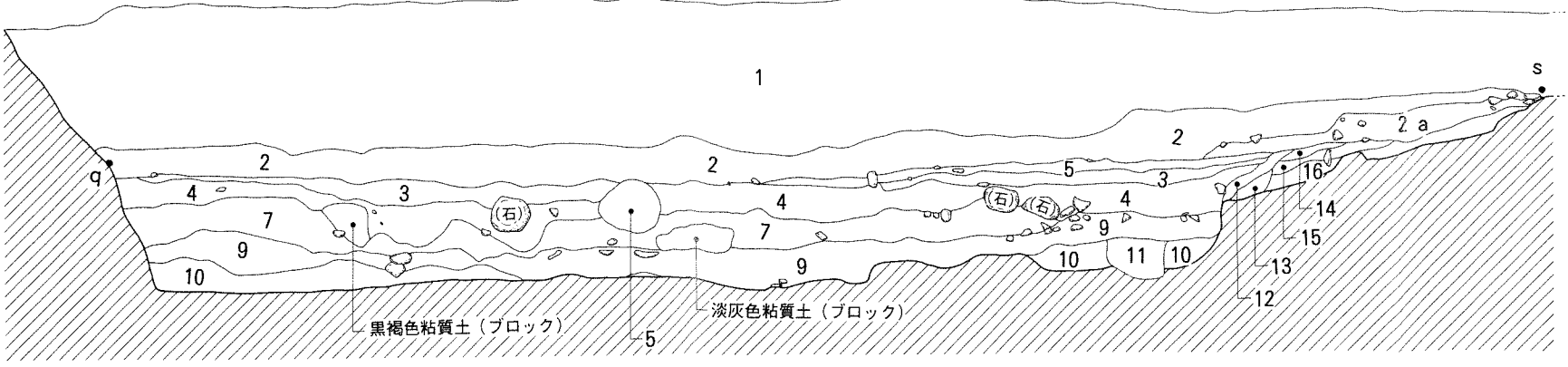
G-5・6、H-6・7から検出された。B・C調査区を跨いでいる。水溜め跡(掘形が確認できる)で、南北の長さ14m、深さ30～70cm。南東側に集水口(深さ70cm・幅80cm)があり、この箇所に多量の遺物が流れ込んでいた。埋土は、二層に大別される。上層は、厚さ15～30cmの砂礫層で、鉄分を含む。下層は、厚さ20～30cmの粘土層で、5層ぐらいに細分されて、円礫が混入する。



第15図 B・C・D調査区実測図



第16図 q-r 土層断面実測図



第17図 q-s 土層断面実測図

番号	土色
1	灰色粘質土(水田)
2	青灰色軟質土(粘性)
2a	青灰色軟質土(2より暗い)
3	灰褐色軟質土
4	暗青灰色軟質土
5	暗赤褐色土(鉄分が混入)
6	青灰色軟質土 + 淡灰色粘質土
7	青灰色軟質土(鉄分が多量に混入)
8	暗黒色粘質土
9	灰色砂質土
10	灰白軟質土
11	灰灰褐色硬質土
12	暗青灰色土 + 暗赤褐色土
13	暗灰色砂質土 + 淡灰白軟質土
14	暗赤褐色土 + 灰色砂質土
15	灰色砂質土 + 暗赤褐色土
16	灰色砂質土(礫が混入)
17	淡灰白軟質土

第4表 土層観察表

第Ⅲ章 出土遺物

大半の遺物は、B・C区の水溜め遺構から出土した。これらは周辺からの流れ込みによるものである。遺構が数多く検出されたA区では、上層土が大きく削平されていたために、遺物の数には、限りがあった。

①青磁（1～14）

10のみ、朝鮮産。他は、中国産。器形は、6～10が皿、13は鉢、他は碗。1～9は、時期的に12世紀から13世紀。4のみが同安窯で、他は竜泉窯。1～3・9の内器面に画花模様。4は、外器面に櫛描文様、内器面に鋭角三角形模様。10は、陶胎の青磁で、時期的に12世紀から14世紀。復元口径12.8cm、底径6.4cm、器高4.2cm。11は、時期的に14世紀後半から15世紀初頭。外器面に退化したヘラ描き蓮弁模様。12・13は、時期的に14世紀後半から15世紀前半。12は、復元口径15.7cm。13は、復元底径6.4cm。13の見込みに印花模様。14は、時期的に14世紀後半から15世紀中葉。

②白磁（15～22）

いずれも中国産。22のみ皿で、他は碗。時期的に12世紀～13世紀。18は端反り碗で、復元口径14.2cm。良質の白磁。19・20は、玉縁口縁で、19は復元口径17.9cm。21は、復元底径6.6cm。高台は低く、畳付きが幅広。22は、内器面に輪花模様。

③土師器Ⅰ（23～44）

大方は、奈良・平安時代の土器。23～26・30～32は杯。27～29・33・34は皿。24・25・30・31・34の底部はヘラ切り。30は、復元底径8.1cm。31は、復元底径6.7cm。26～29は糸切り離しで、28・29は平底。時期的に14世紀から16世紀。33は小皿で、復元口径8.2cm、器高1.5cm、復元底径6.0cm。底部に板目圧痕。

35～44は、高台付き碗。40は、9世紀代の内黒土器で、器厚は薄く、高台が極めて低い。42・43の高台は大きく張り出す。

④土師器Ⅱ（45～56）

6世紀代の土器。45～49は杯の身。48は復元口径13.8cm、49は復元口径14.7cm。50～54は鉢。50は復元口径11.2cm、51は復元口径14.2cm、52は復元口径14.1cm、53は復元口径13.9cm。55・56は口縁部で外弯する。55は軽量土器。

⑤土師器Ⅲ（57～73）

奈良・平安時代の土器。57～61は、壺の頸部。59は復元口径12.2cm、60は復元口径11.0cm、61は復元口径18.7cm。62・63は甌の取手で、先端部は、62が丸みを帯び、63が角状を呈する。64～71は甌の口縁部で、67・70・71は口唇部が扁平。71～73の外器面にハケ目。

⑥中世雑器（74～76）

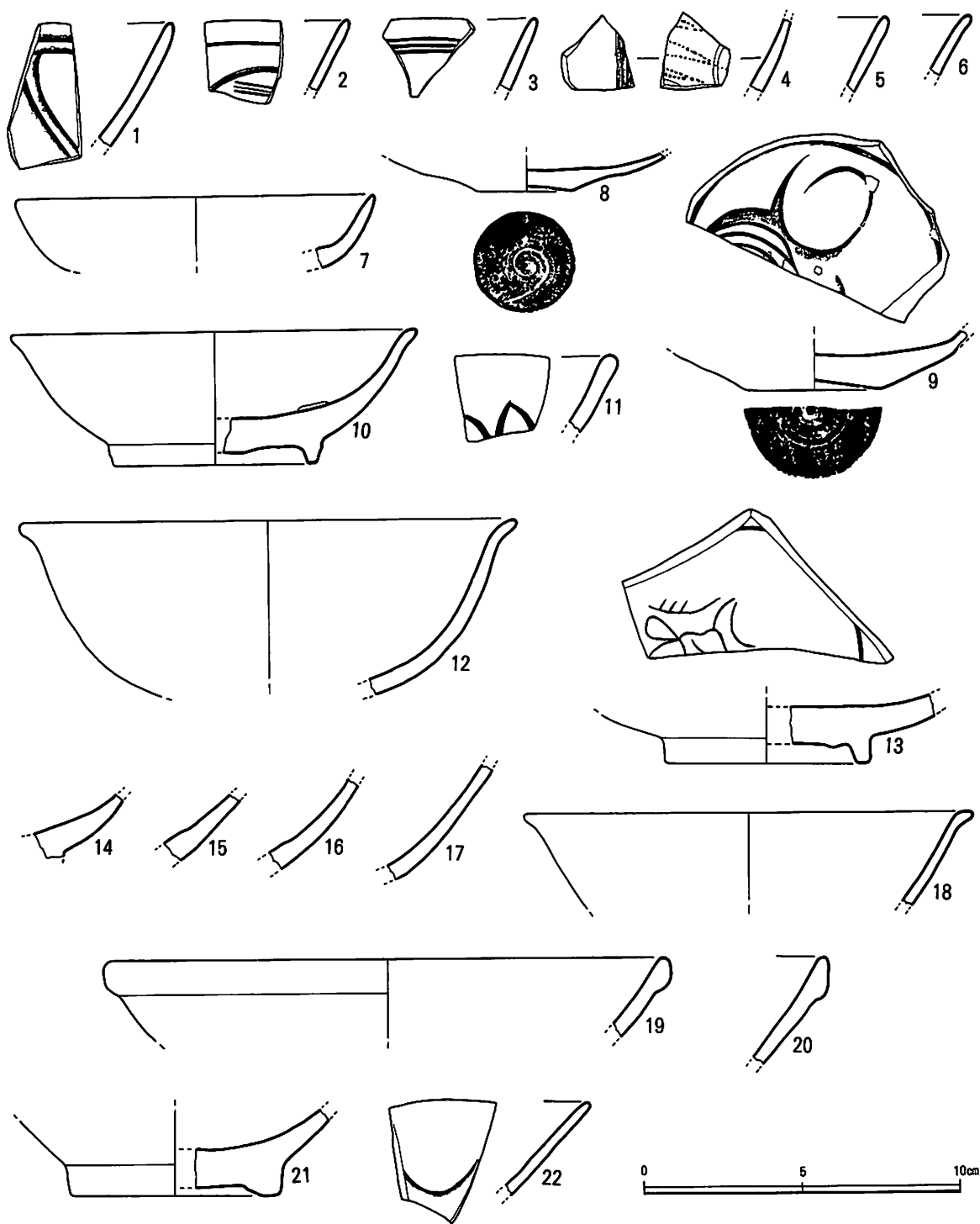
74は瓦質土器で、高台付き碗の底部。底径12.6cm、高台高は僅かに0.2cm。75は土師系土器で、肉太の体部に突帯が付く。76は滑石製の石鍋。

⑦須恵器（77～126）

7世紀代の須恵器。77～81は坏の蓋。78は復元口径15.3cm、79は復元口径14.8cm、81は復元口径14.9cm。82～86は坏の身。86は復元口径11.8cm、器高3.8cm。87～91は坏。87は平底で、底径9.4cm。88・91は体部が直線的に伸びる。87・89・90は体部が内弯する。88は復元口径15.8cm、89は復元口径16.4cm。

92～95は壺の頸部で、93は「く」の字形に大きく外弯する。94は口径12.7cm、95は平瓶で、復元口径7.5cm。97・98は、壺の脚で、97は復元底径23.0cm。

99～126は壺、もしくは甌の破片。大方は、内器面に円文叩き、外器面は、格子目叩きか平行叩き。



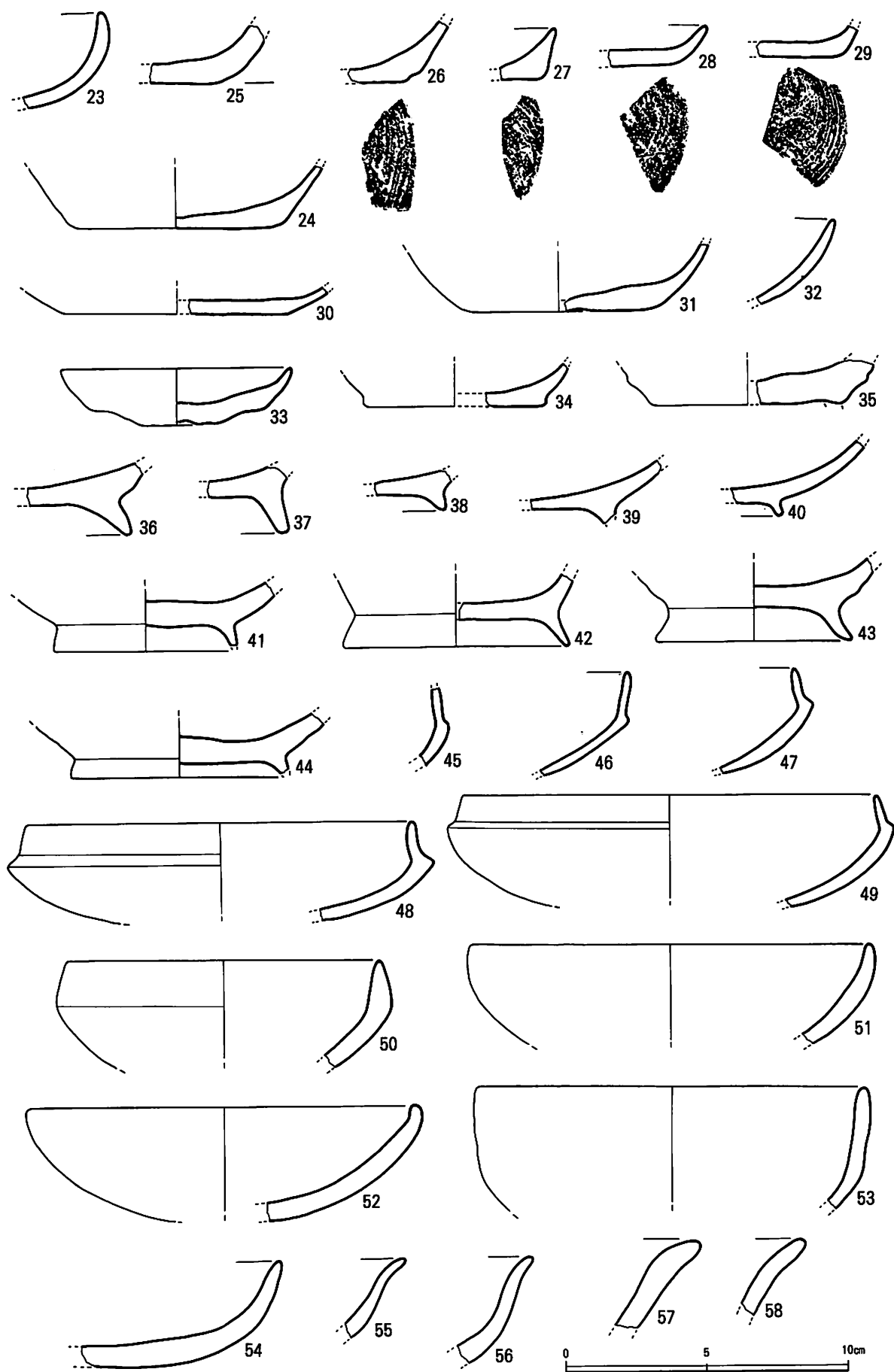
第18図 出土遺物実測図①

No	器 種	器 厚	形態の特徴	文様・手法・調整	備 考
1	青磁碗 中国(竜泉窯) 12C～13C	口縁部 3.0mm 体部 5.0mm	体部は、僅かに内弯する。 口縁部の外器面は、やや丸みを帯びる。	〔内器面〕画花文様。	〔釉色〕オリーブ灰緑色 〔出土〕C区・Ⅲ層
2	青磁碗 中国(竜泉窯) 12C～13C	口縁部 3.0mm 体部 4.0mm	口縁部は、僅かに外弯する。	〔内器面〕画花文様。	〔釉色〕オリーブ灰緑色 〔出土〕C区・Ⅱ層
3	青磁碗 中国(竜泉窯) 12C～13C	口縁部 3.0mm 体部 4.0mm	口縁部は、僅かに外弯する。	〔内器面〕画花文様。	〔釉色〕オリーブ灰緑黄色 〔出土〕C区・Ⅲ層
4	青磁碗 中国(同安窯) 12C～13C	体部上位 3.0mm 下位 4.0mm	体部は、僅かに外弯する。	〔外器面〕描文様。 〔内器面〕極細点で描かれた鋭角三角形文様。放射状に描かれている。	〔釉色〕オリーブ灰白緑色 〔出土〕C区・Ⅲ層
5	青磁碗 中国(竜泉窯) 12C～13C	口縁部 4.0mm 体部 3.5mm	口縁部は、直線的に伸びる。		〔釉色〕オリーブ灰色 〔焼成〕焼切っている。 〔出土〕C区・Ⅳ層
6	青磁皿 中国(竜泉窯) 12C～13C	口縁部 2.5mm 体部 3.0mm	口縁部は、やや外弯する。		〔釉色〕オリーブ灰色 〔出土〕C区・Ⅲ層
7	青磁皿 中国(竜泉窯) 12C～13C	口縁部 2.0mm 体部中位 4.0mm 下位 5.5mm	復元口径 11.3cm 体部は、やや内弯気味に伸びる。	〔外器面〕 ロクロ回転痕が稜線状に残る。	〔釉色〕オリーブ灰緑色 〔内器面〕発色が不完全 〔出土〕B区・Ⅲ層
8	青磁皿 中国(竜泉窯) 12C～13C	体部中位 3.0mm 下位 5.0mm 底部中央 5.5mm	底径 3.1cm 外底部は平底で、端部は角張る。	外器面下位から外底部にかけて無釉。	〔釉色〕くすんだオリーブ灰褐色 〔出土〕C区・Ⅳ層
9	青磁皿 中国(竜泉窯) 12C～13C	体部中位 4.0mm 下位 6.0mm 底部中央 8.0mm 端部 10.0mm	底径 4.3cm 外底面中央は、指頭圧痕により凹む。	外器面下位から外底部は無釉。 〔見込〕画花文様	〔釉色〕オリーブ灰緑黄色 〔出土〕C区・Ⅳ層
10	青磁(陶胎)皿 朝鮮 12C～14C(?)	口縁部 3.5mm 体部 6.0mm 底部 11.0mm	復元口径 12.8cm 底径 6.4cm 器高 4.2cm ロクロ回転痕。 口縁部で外弯する。 見込みに砂目積痕。	高台内にも施釉。	〔釉色〕オリーブ灰色 〔出土〕B区・Ⅲ層
11	青磁碗 中国(竜泉窯) 14C後半～15C初	口縁部 6.0mm 体部 5.0mm	口唇部は肥厚し、丸味を帯びる。	〔外器面〕 退化したヘラ描き蓮弁文様。	〔釉色〕オリーブ灰緑色 〔出土〕C区・Ⅱ層
12	青磁碗 中国 14C後半～15C前半	口縁部 3.0mm 体部 5.0mm	復元口径 15.7cm 端反碗。 外器面にロクロ回転痕の指頭圧痕が沈線状に残る。		〔釉色〕オリーブ灰青色 〔器面〕貫入が目立つ。 〔出土〕C区・Ⅲ層
13	青磁鉢 中国(竜泉窯) 14C後半～15C前半	体部 9.0mm 底部 12.0mm	復元底径 6.4cm 良質の青磁。 外器面にロクロ回転痕。 極浅の沈線状を呈する。	高台内は無釉。 〔見込〕印花文様。	〔釉色〕オリーブ灰緑色 〔出土〕A区・Ⅱ層 SI(01)
14	青磁碗 中国 14C後半～15C中葉	体部中位 4.0mm 下位 7.0mm			〔釉色〕オリーブ灰青色 〔出土〕A区・Ⅱ層 SD(02)
15	白磁碗 中国 12C～13C	体部中位 4.0mm 下位 7.0mm		外器面下位は無釉。 内器面の立ち上がりに沈線。	〔釉色〕白黄色 〔出土〕B区・Ⅲ層
16	白磁碗 中国 12C～13C	体部上位 4.0mm 中位 5.0mm 下位 6.0mm		内器面の立ち上がりに沈線。	〔釉色〕灰白色 〔焼成〕焼切っている。 〔出土〕B区・Ⅲ層

第5表 出土遺物観察表①

No	器 種	器 厚	形態の特徴	文様・手法・調整	備 考
17	白磁碗 中国 12C~13C	体部中位 4.0mm 下位 5.0mm	体部は、やや内弯する。	外器面に指頭圧痕による釉の剥落箇所がある。	〔釉色〕 白灰色 〔出土〕 C区・Ⅲ層
18	白磁碗 中国 12C~13C	口唇部 5.0mm 体部 3.0mm	復元口径 14.2cm 端反碗。 良質の白磁。	_____	〔釉色〕 白黄灰色 〔焼成〕 焼切っている。 〔出土〕 B区・Ⅲ層
19	白磁碗 中国 12C~13C	口唇部 3.5mm 口縁部 7.0mm 体部 5.0mm	復元口径 17.9cm 玉縁口縁。	_____	〔釉色〕 白灰色 〔出土〕 B区・Ⅲ層
20	白磁碗 中国 12C~13C	口唇部 4.0mm 口縁部 8.0mm 体部 4.0mm	玉縁口縁。	_____	〔釉色〕 白色 〔出土〕 C区・Ⅳ層
21	白磁碗 中国 12C~13C	体部中位 5.0mm 下位 7.0mm 底部 12.0mm	復元底径 6.6cm 高台は低く、登付は幅広。 底部は肉太。	外器面下位から高台内にかけて無釉。 内器面の立ち上がりに沈線。	〔釉色〕 白灰色 〔出土〕 C区・Ⅲ層
22	白磁皿(?) 中国 12C~13C	口縁部 2.0mm 体部 3.0mm	体部は僅かに外弯する。 外器面が、やや凸凹。	〔内器面〕 輪花文様。	〔釉色〕 白灰色 〔器面〕 口唇部の一部が茶色化している。 〔出土〕 C区・Ⅲ層
23	土師器杯	口縁部 3.0mm 体部中位 5.0mm 下位 4.0mm	体部は、上位にかけて内弯し、肥厚する。	_____	〔器色〕 灰茶色 〔胎土〕 白色粒を混入。 〔出土〕 A区
24	土師器杯	体部中位 3.0mm 下位 7.0mm 底部中央 4.0mm 端部 8.0mm	復元底径 7.2cm 底部中央は薄壁。 外底端は、やや丸味を帯びる。	〔外底面〕 ヘラ切り。	〔器色〕 灰茶色 〔焼成〕 堅緻 〔出土〕 C区・Ⅳ層
25	土師器杯	体部 8.0mm 底部 7.0mm	器厚は、やや肉太。	〔外底面〕 ヘラ切り。	〔器色〕 乳白色 〔胎土〕 鉱物の混入 〔焼成〕 堅緻 〔出土〕 C区・Ⅲ層
26	土師器杯	体部下位 8.0mm 底部 5.0mm	_____	〔外底面〕 糸切り。 〔外底端〕 2条の沈線。	〔器色〕 茶褐色 〔胎土〕 金雲母が混入 〔焼成〕 堅緻 〔出土〕 C区・Ⅳ層
27	土師器皿	口縁部 3.0mm 体部 6.0mm 底部 5.5mm	_____	〔外底面〕 糸切り。	〔器色〕 鈍い橙色 〔胎土〕 金雲母と米粒状の白色粒が混入 〔出土〕 C区・Ⅲ層
28	土師器皿	口縁部 3.0mm 体部 4.0mm 底部 6.0mm	平底。	〔外底面〕 糸切り。	〔器色〕 褐橙色 〔焼成〕 堅緻 〔出土〕 C区・Ⅲ層
29	土師器皿	体部下位 5.0mm 底部 5.0mm	平底。	〔外底面〕 糸切り。	〔器色〕 褐灰黄色 〔出土〕 C区・Ⅳ層
30	土師器杯	体部下位 3.0mm 底部 5.0mm	復元底径 8.1cm	〔外底面〕 ヘラ切り。	〔器色〕 乳白色 〔焼成〕 堅緻 〔出土〕 C区・Ⅲ層
31	土師器杯	体部中位 3.0mm 下位 7.0mm 底部中央 4.0mm 端部 9.0mm	復元底径 6.7cm 底部の中央は薄壁。	〔外底面〕 ヘラ切り。	〔器色〕 褐灰色(桃色) 〔器面〕 スス付着 〔胎土〕 黒雲母が混入 〔出土〕 B区・Ⅲ層
32	土師器杯	口縁部 3.0mm 体部中位 4.0mm 下位 3.0mm	口縁直口。 体部は内弯する。	_____	〔器色〕 褐黄色 〔出土〕 C区・Ⅲ層
33	土師器小皿	口縁部 3.0mm 体部 4.0mm 底部 7.0mm	復元口径 8.2cm 器高 1.5cm 復元底径 6.0cm 内底面は、指頭圧痕により凸凹。	〔外底面〕 板目圧痕。	〔器色〕 乳褐色 〔出土〕 C区・Ⅲ層
34	土師器皿	体部 4.0mm 底部中央 5.0mm 端部 7.0mm	復元底径 6.3cm	〔外底面〕 平底、ヘラ切り。	〔器色〕 乳褐色 〔胎土〕 鉱物が混入 〔焼成〕 堅緻 〔出土〕 B区・Ⅲ層

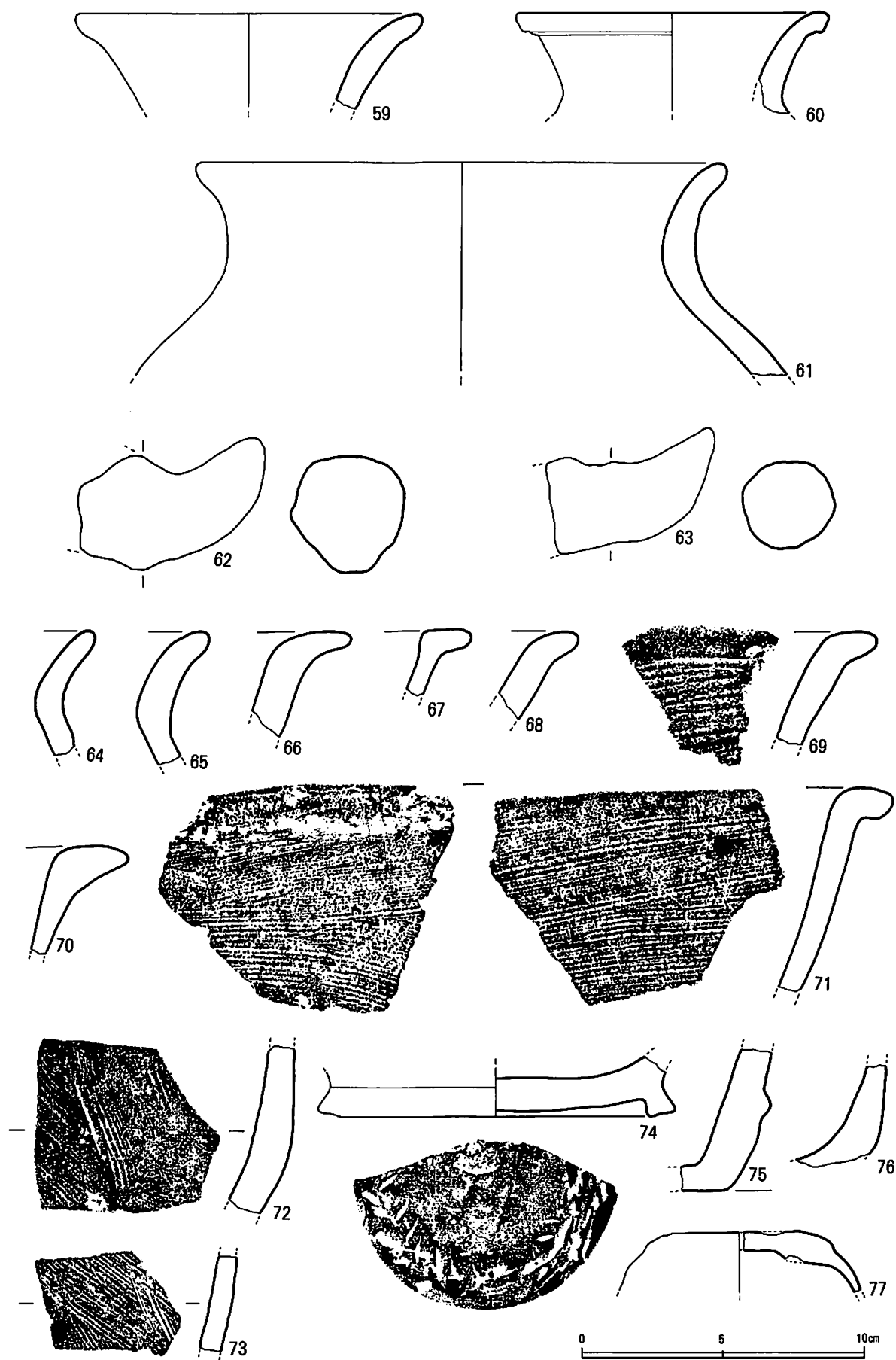
第6表 出土遺物観察表②



第19図 出土遺物実測図②

No	器 種	器 厚	形態の特徴	文様・手法・調整	備 考
35	土師器 高台付碗	体部 10.0mm 底部中央 10.0mm 端部 11.0mm	復元底径 6.9cm 底部は肉太。	_____	〔器色〕 乳白色 〔胎土〕 精良 〔焼成〕 堅緻 〔出土〕 C区・Ⅲ層
36	土師器 高台付碗	体部 8.0mm 底部中央 7.0mm 端部 10.0mm	幅広い器面。	高台内側は強いナデ。	〔器色〕 乳灰色 〔出土〕 B区・Ⅲ層
37	土師器 高台付碗	底部中央 6.0mm 端部 8.0mm	高台は高く、大きく張り出す。	_____	〔器色〕 鈍い橙色 〔胎土〕 わずかに白色粒が混入。 〔出土〕 C区・Ⅲ層
38	土師器 高台付碗	底部中央 5.0mm 端部 7.0mm	高台は低い。	_____	〔器色〕 灰褐色 〔焼成〕 堅緻 〔出土〕 C区・Ⅲ層
39	土師器 高台付碗	体部中位 4.0mm 下位 6.0mm 底部中央 3.0mm 端部 5.0mm	_____	_____	〔器色〕 乳白色 〔胎土〕 精良 〔焼成〕 堅緻 〔出土〕 B区・Ⅲ層
40	土師器 高台付碗	体部上位 4.0mm 中位 5.0mm 下位 6.0mm 底部 6.0mm	内黒土器。 高台は低い。 体部は大きく開く。	_____	〔器色〕 外：鈍い橙色 内：黒色 〔胎土〕 精良 〔出土〕 B区・Ⅲ層
41	土師器 高台付碗	体部 8.0mm 底部 9.0mm	復元底径 6.6cm 底部・体部とも、やや肉太。内底面は、指頭圧痕により凹む。	ローリングが激しい。	〔器色〕 乳褐色 〔胎土〕 良 〔出土〕 C区・Ⅳ層
42	土師器 高台付碗	体部 7.0mm 底部中央 6.0mm 端部 7.0mm	復元底径 8.0cm 内底面は、指頭圧痕により凹む。 高台は大きく張り出す。	_____	〔器色〕 乳白色 〔胎土〕 精良 〔出土〕 B区・Ⅲ層
43	土師器 高台付碗	体部下位 8.0mm 底部 8.0mm	復元底径 7.0cm 高台は大きく張り出す。	_____	〔器色〕 乳白色 〔胎土〕 精良 〔出土〕 C区・Ⅳ層
44	土師器 高台付碗	体部下位 8.0mm 底部 8.0mm	大型の土師器。	ローリングが激しい。	〔器色〕 内：白褐色 外：灰白色、桃灰色 〔胎土〕 鉾物の混入 〔出土〕 C区・Ⅲ層
45	土師器 杯の身	体部上位 3.5mm 中位 5.0mm 下位 4.0mm	_____	_____	〔器色〕 褐色 〔出土〕 C区・Ⅲ層
46	土師器 杯の身	体部 3.0mm	_____	_____	〔器色〕 褐灰色 〔外器面〕 ススが付着 〔出土〕 B区・Ⅲ層
47	土師器 杯の身	体部上位 3.0mm 中位 5.0mm	_____	_____	〔器色〕 褐色 〔出土〕 C区・Ⅳ層
48	土師器 杯の身	体部 5.0mm	復元口径 13.8cm	_____	〔器色〕 灰褐色 〔外器面〕 ススが付着 〔出土〕 C区・Ⅳ層
49	土師器 杯の身	体部上位 4.0mm 下位 6.0mm	復元口径 14.7cm	_____	〔器色〕 灰褐色 〔焼成〕 堅緻 〔出土〕 C区・Ⅳ層
50	土師器 鉢	口縁部 3.0mm 体部上位 6.0mm 中位 8.0mm 下位 6.0mm	復元口径 11.2cm	_____	〔器色〕 灰褐色 〔外器面〕 ススが付着 〔出土〕 C区・Ⅳ層
51	土師器 鉢	口縁部 4.0mm 体部中位 7.0mm 下位 6.0mm	復元口径 14.2cm	_____	〔器色〕 褐灰色 〔焼成〕 堅緻 〔出土〕 C区・Ⅳ層
52	土師系土器 鉢	口縁部 4.0mm 体部 7.0mm	復元口径 14.1cm	口縁部は、強い横ナデ。	〔器色〕 灰褐色 〔外器面〕 ススが付着 〔胎土〕 小礫・白色粒 〔出土〕 C区・Ⅳ層
53	土師系土器 鉢	口縁部 5.0mm 体部中位 5.0mm 下位 4.0mm	復元口径 13.9cm 体部は、途中で最大の肥厚となる。	_____	〔器色〕 茶褐色 〔胎土〕 小礫と白色粒が多量に混入 〔出土〕 C区・Ⅳ層

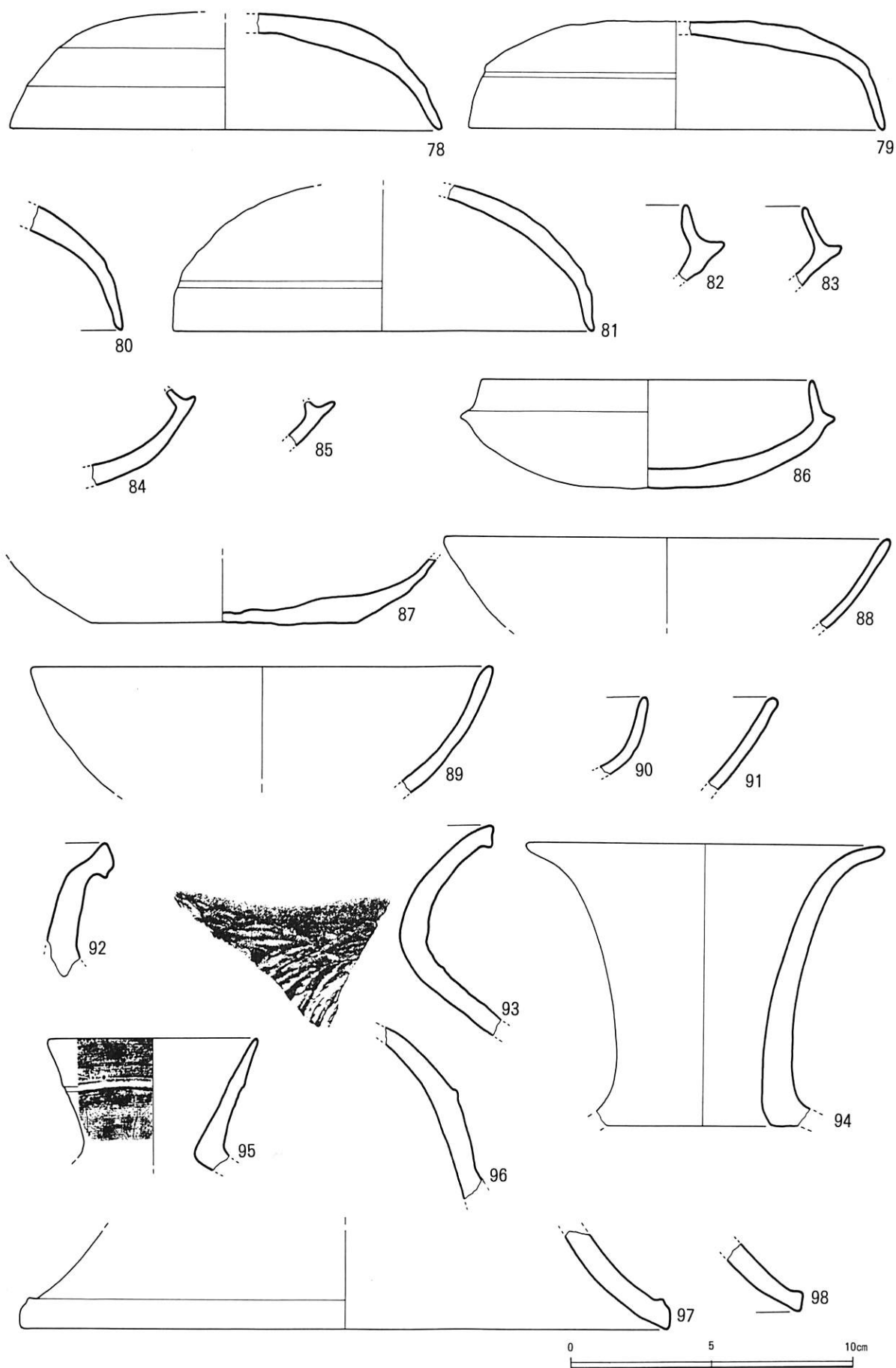
第7表 出土遺物観察表③



第20図 出土遺物実測図③

No	器 種	器 厚	形態の特徴	文様・手法・調整	備 考
54	土師器 鉢	口縁部 4.0mm 体部 7.0mm 底部 8.0mm	_____	_____	〔器色〕 灰(褐)色 〔底部〕 スス付着 〔胎土〕 白色粒を混入 〔出土〕 C区・Ⅲ層
55	土師系土器	口縁部 3.0mm 体部中位 4.0mm	軽量土器 口縁部で外弯する。	_____	〔器色〕 茶褐色 〔出土〕 A区・柱穴
56	土師系土器	口縁部 3.5mm 体部中位 5.0mm 下位 7.0mm	口縁部で外弯する。	_____	〔器色〕 茶橙色 〔胎土〕 白色粒の混入 〔焼成〕 堅緻 〔出土〕 A区・柱穴
57	土師系土器 壺	口縁部 6.0mm 頸部中位 9.0mm 下位 7.0mm	_____	〔外器面〕 丁寧なナデ。 〔内器面〕 粗いナデ。	〔器色〕 褐灰色 〔胎土〕 白色粒・金雲母 〔焼成〕 堅緻 〔出土〕 C区・Ⅳ層
58	土師系土器 壺	口縁部 5.0mm 頸部 7.0mm	_____	_____	〔器色〕 橙色 〔胎土〕 小礫粒・白色粒 〔焼成〕 C区・Ⅳ層
59	土師系土器 壺	口縁部 7.0mm 頸部 9.0mm	復元口径 12.2cm	_____	〔器色〕 橙褐色 〔胎土〕 精良 〔焼成〕 堅緻 〔出土〕 A区
60	土師系土器 壺	口縁部 6.0mm 頸部中位 8.0mm 下位 10.0mm	復元口径 11.0cm 口唇部幅 5.0mm	_____	〔器色〕 褐白灰色 〔胎土〕 精良 〔焼成〕 堅緻 〔出土〕 C区・Ⅳ層
61	土師系土器 壺	口縁部 8.0mm 頸部中位 12.0mm 下位 10.0mm	復元口径 18.7cm	_____	〔器色〕 明橙色 〔胎土〕 白色粒が多量混入 〔出土〕 C区・Ⅳ層
62	甌の取手	上位 2.0mm 下位 4.0mm	先端部は、やや丸味を帯 びる。	_____	〔器色〕 乳白褐色 〔出土〕 C区・Ⅲ層
63	甌の取手	上位 2.0mm 下位 4.0mm	先端部は鋭角。	_____	〔器色〕 褐茶色 〔胎土〕 白色粒が多量混入 〔出土〕 C区・Ⅳ層
64	土師系土器 小型壺	口縁部 5.0mm 体部 9.0mm	頸部は大きく外弯する。	_____	〔器色〕 褐橙桃色 〔胎土〕 白色粒が多量混入 〔焼成〕 堅緻 〔出土〕 C区・Ⅳ層
65	土師系土器 壺	口縁部 10.0mm 頸部中位 12.0mm 下位 8.0mm	頸部は大きく外弯する。	_____	〔器色〕 褐灰色 〔胎土〕 白色粒が多量混入 〔出土〕 C区・Ⅲ層
66	土師系土器 壺	口縁部 8.0mm 頸部 13.0mm	頸部は大きく外弯する。 質量感がある。	_____	〔器色〕 褐茶色 〔胎土〕 大きな白色粒 〔出土〕 A区・Ⅱ層
67	土師系土器 壺	口縁部 7.0mm 頸部 6.0mm	頸部は大きく外弯し、口 唇部は扁平。 口唇部幅 1.8cm	_____	〔器色〕 灰褐色 〔胎土〕 白色粒が混入 〔出土〕 C区・Ⅲ層
68	土師系土器	口縁部 9.0mm 頸部 11.0mm	_____	〔外器面〕 上位に強い横ナデ	〔器色〕 内：鈍い橙色 外：灰褐黒色 〔胎土〕 白色粒が混入 〔出土〕 A区・Ⅱ層
69	土師系土器	口縁部 11.0mm 頸部中位 11.0mm 下位 9.0mm	口縁部は、大きく外弯す る。	〔内器面〕 ヘラナデ。	〔器色〕 灰褐黒色 〔胎土〕 白色粒が多量混入 〔出土〕 B区・Ⅲ層 暗青灰色土層
70	土師系土器 小型壺	頸部中位 10.0mm 下位 6.0mm	口唇部幅 2.4cm 頸部は大きく外弯し、口 唇部は扁平。	_____	〔器色〕 褐茶色 〔胎土〕 大きな白色粒が多 量に混入 〔出土〕 A区・Ⅱ層
71	土師系土器	体部中位 9.0mm 下位 8.0mm	口縁部は大きく外弯し、 口唇部は扁平(幅1.8cm)。	〔外器面〕 ハケ目。 〔内器面〕 横ナデ。	〔器色〕 灰褐黒色 〔胎土〕 黒雲母が混入 〔出土〕 B区・Ⅲ層
72	土師系土器	体部上位 10.0mm 下位 13.0mm	_____	〔外器面〕 ハケ目。 〔内器面〕 ナデ。	〔器色〕 褐灰白色 〔器面〕 ススが付着 〔胎土〕 精良 〔出土〕 A区・Ⅰ-1層 S I (01)

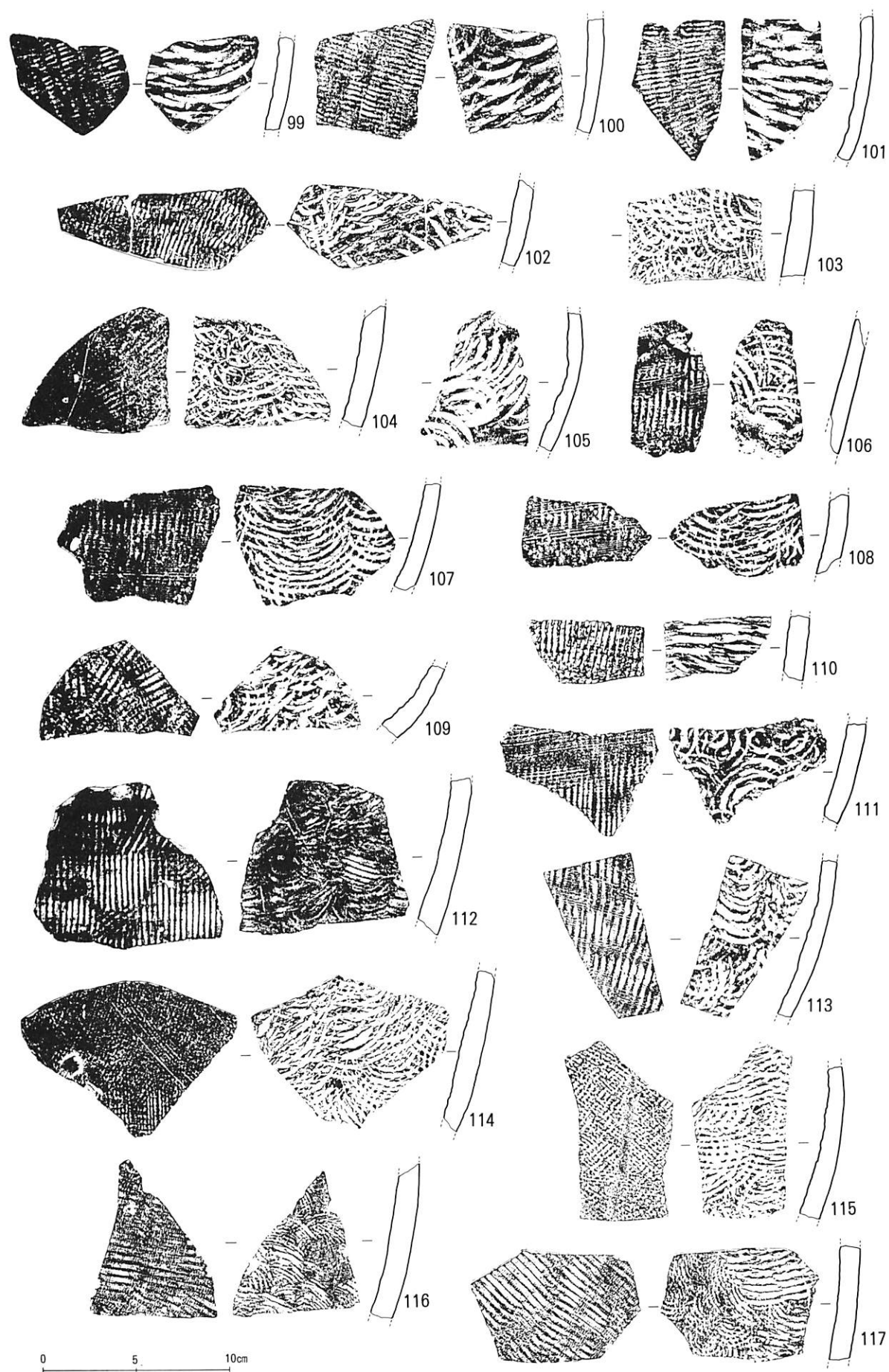
第8表 出土遺物観察表④



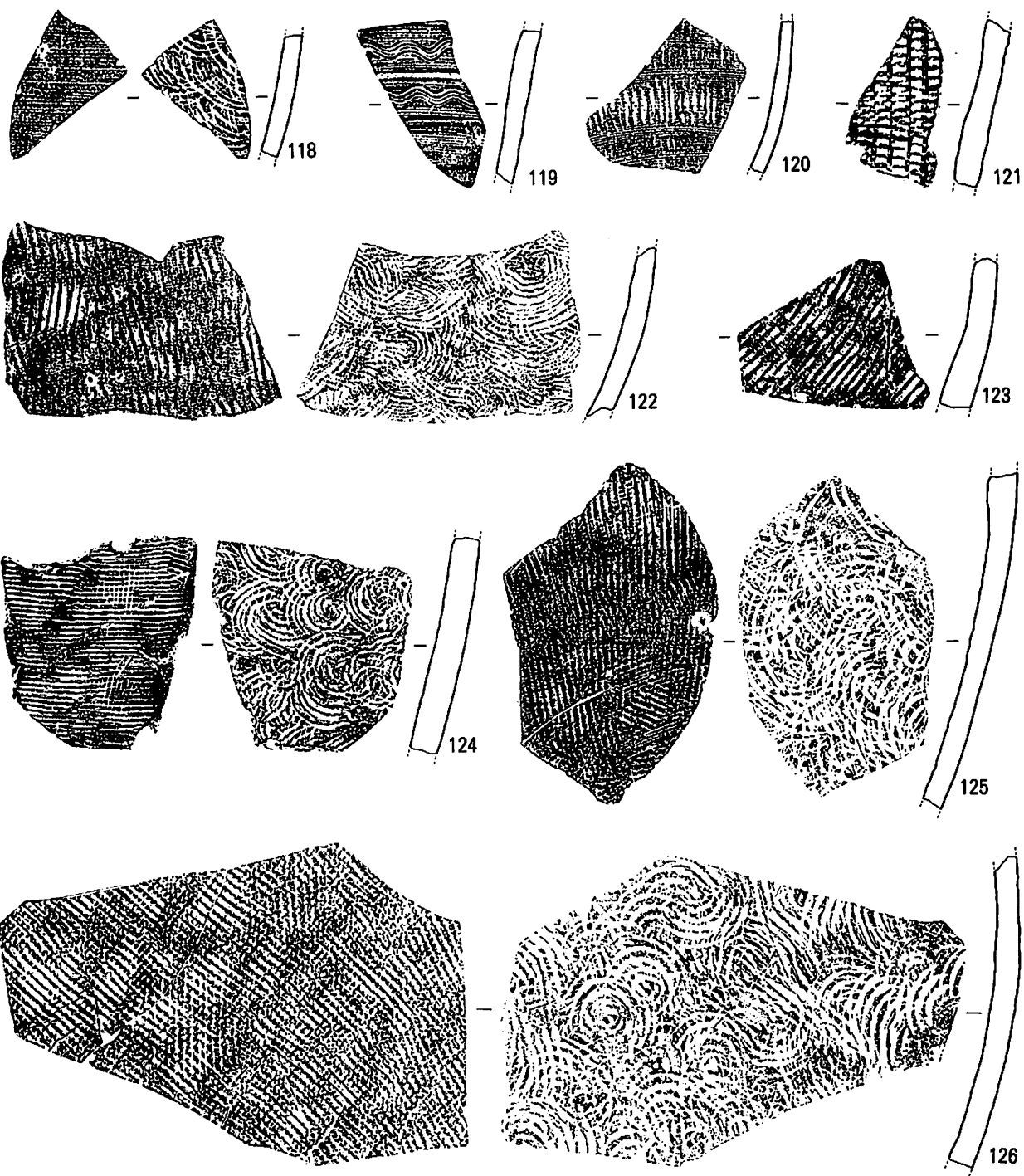
第21図 出土遺物実測図④

No	器 種	器 厚	形態の特徴	文様・手法・調整	備 考
73	土師系土器	体部 8.0mm		〔外器面〕ハケ目。 〔内器面〕ナデ。	〔器色〕外：褐黄色 内：褐黄橙色 〔胎土〕白色粒・鉱物が 混入 〔出土〕A区
74	瓦質土器	底部 12.0mm	底径 12.6cm 高台高 0.2cm 足幅 0.9cm	高台内にヘラ痕。	〔器色〕外：灰色 内：褐白色 〔出土〕C区・Ⅳ層
75	中世雄器 (火舎?)	体部 15.0mm 底部 9.0mm	器壁は肉太。		〔器色〕灰白褐色 〔焼成〕堅緻 〔出土〕B区・Ⅱ層
76	石 鍋 (滑石製)	体部下位 12.0mm			〔出土〕C区・Ⅲ層
77	須恵器 坏の蓋	体部上位 7.0mm 中位 11.0mm 下位 4.0mm			〔出土〕C区・Ⅳ層
78	須恵器 坏の蓋	体部上位 6.0mm 中位 9.0mm 下位 3.0mm	口径 15.3cm		〔出土〕C区・Ⅳ層
79	須恵器 坏の蓋	体部上位 6.0mm 中位 8.0mm 下位 3.0mm	復元口径 14.8cm		〔出土〕C区・Ⅳ層
80	須恵器 坏の蓋	体部上位 9.0mm 中位 6.0mm 下位 3.0mm			〔出土〕C区・Ⅳ層
81	須恵器 坏の蓋	体部下位 3.0mm 中位 7.0mm 上位 5.0mm	復元口径 14.9cm		〔出土〕C区・Ⅳ層
82	須恵器 坏の身	体部上位 7.0mm 中位 4.0mm			〔出土〕C区・Ⅳ層
83	須恵器 坏の身	体部上位 4.0mm			〔出土〕C区・Ⅳ層
84	須恵器 坏の身	体部上位 5.0mm 中位 5.0mm 下位 6.0mm			〔出土〕C区・Ⅳ層
85	須恵器 坏の身	体部上位 3.0mm 中位 5.0mm			〔出土〕B区・Ⅱ層
86	須恵器 坏の身	体部上位 5.0mm 中位 8.0mm 下位 7.0mm	復元口径 11.8cm 器高 3.8cm		〔出土〕C区・Ⅳ層
87	須恵器 坏	体部中位 4.0mm 下位 8.0mm 底部中央 4.0mm 端部 10.0mm	底径 9.4cm 平底。 体部は内弯する。		〔出土〕C区・Ⅳ層
88	須恵器 坏	口縁部 4.0mm 体部 3.0mm	復元口径 15.8cm 体部は直線的に延びる。		〔出土〕B区・Ⅲ層
89	須恵器 坏	口縁部 5.0mm 体部中位 4.0mm 下位 5.0mm	復元口径 16.4cm 体部は内弯する。		〔出土〕C区・Ⅱ層
90	須恵器 坏	口縁部 3.0mm 体部 4.0mm	体部は内弯する。		〔出土〕C区・Ⅳ層
91	須恵器 坏	口縁部 4.0mm 体部 4.0mm	体部は直線的に延びる。		〔出土〕C区・Ⅲ層
92	須恵器 壺の頸部	口縁部 8.0mm 頸部 10.0mm	口唇部幅 1.3cm		〔出土〕C区・Ⅲ層
93	須恵器 壺の頸部	口縁部 6.0mm 頸部中位 9.0mm 下位 7.0mm	口唇部幅 0.8cm		〔出土〕B区・Ⅱ層
94	須恵器 壺の頸部	口縁部 4.0mm 頸部中位 8.0mm 下位 12.0mm	口径 12.7cm 頸部径 6.5cm	丁寧なロクロ回転痕。	〔出土〕A区・Ⅱ層 SI(01) 〔胎土〕精良
95	須恵器 平瓶の頸部	口縁部 3.0mm 頸部中位 5.0mm 下位 10.0mm	復元口径 7.5cm		〔出土〕C区・Ⅲ層

第9表 出土遺物観察表⑤



第22図 出土遺物実測図⑤



0 5 10cm

第23図 出土遺物実測図⑥

No	器 種	器 厚	形態の特徴	文様・手法・調整	備 考
96	須恵器 壺の胴部	体部上位 6.0mm 下位 7.0mm	中位で、やや肥厚する。	—————	〔出土〕C区・Ⅲ層
97	須恵器 壺の脚部	体部下位 8.0mm	復元底径 23.0cm	—————	〔出土〕C区・Ⅱ層
98	須恵器 壺の脚部	体部中位 7.0mm 下位 5.0mm	—————	—————	〔出土〕B区・Ⅱ層
99	須恵器	体部 8.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 格子目叩き	〔出土〕C区・Ⅳ層
100	須恵器	体部 8.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 格子目叩き	〔出土〕C区・Ⅳ層
101	須恵器	体部 7.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 格子目叩き	〔出土〕B区・Ⅴ層
102	須恵器	体部 8.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 格子目叩き	〔出土〕C区・Ⅳ層
103	須恵器	体部 12.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 無文	〔出土〕B区・Ⅱ層
104	須恵器	体部 11.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 格子目叩き	〔出土〕B区・Ⅱ層
105	須恵器	体部 7.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 無文	〔出土〕B区・Ⅱ層
106	須恵器	体部 9.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 格子目叩き	〔出土〕A区・Ⅱ層 S I (01)
107	須恵器	体部 9.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 格子目叩き	〔出土〕A区・Ⅱ層 S I (01)
108	須恵器	体部 10.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 格子目叩き	〔出土〕A区・Ⅰ層
109	須恵器	体部 9.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 格子目叩き	〔出土〕C区・Ⅳ層
110	須恵器	体部 11.0mm	—————	〔内器面〕 平行叩き 〔外器面〕 平行叩き	〔出土〕B区・Ⅳ層
111	須恵器	体部 10.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 格子目叩き	〔出土〕B区・Ⅴ層
112	須恵器	体部 11.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 平行叩き	〔出土〕B区・Ⅴ層
113	須恵器	体部 8.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 平行叩き	〔出土〕C区・Ⅳ層
114	須恵器	体部 12.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 平行叩き	〔出土〕C区・Ⅳ層
115	須恵器	体部 9.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 格子目叩き	〔出土〕C区・Ⅳ層
116	須恵器	体部 12.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 平行叩き	〔出土〕B区・Ⅴ層
117	須恵器	体部 11.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 平行叩き	〔出土〕B区・Ⅴ層
118	須恵器	体部 8.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 平行叩き	〔出土〕B区・Ⅲ層
119	須恵器	体部 9.0mm	—————	〔外器面〕 平行・波状の沈 線文。	〔出土〕B区・Ⅴ層
120	須恵器	体部 6.0mm	—————	〔外器面〕 横位沈線の後、 縦位の叩き	〔出土〕B区・Ⅴ層
121	須恵器	体部 11.0mm	—————	〔内器面〕 無文 〔外器面〕 格子目叩き	〔出土〕B区・Ⅱ層
122	須恵器	体部 9.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 平行叩き	〔出土〕C区・Ⅳ層
123	須恵器	体部 12.0mm	—————	〔内器面〕 無文 〔外器面〕 平行叩き	〔出土〕C区・Ⅲ層
124	須恵器	体部 13.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 平行叩き	〔出土〕B区・Ⅲ層
125	須恵器	体部上位 13.0mm 下位 10.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 平行叩き	〔出土〕C区・Ⅳ層
126	須恵器	体部 10.0mm	—————	〔内器面〕 円文叩き 〔外器面〕 格子目叩き	〔出土〕C区・Ⅲ層

第10表 出土遺物観察表⑥

第Ⅳ章 ま と め

樋ノ口遺跡は、大林地区を貫く県道と初田川の間に位置する。一帯は、斜面を開墾した畑地と水田で、今回、圃場整備事業の対象地となった一角から、事前の試掘調査によって発見された。調査の結果、当該地は、大幅に削平されていることが判明した。明らかに、開墾作業によるものである。当然、遺構の残りは良くない。調査区は、地形からA区とB・C・D区に二分される。

A区は、面積約500㎡で、平坦地形をなす。時期の分かる検出遺構は、6～7世紀代の竪穴住居址のみである。現在の集落は、県道を境に大方、東側域で展開するが、両時期においては、もっと西下の斜面部まで広がっていたことが分かる。竪穴住居址は、土師器と須恵器を伴っているが、同時代の遺構は、近隣の米原台地(鞠智城跡)からも検出されている。掘立柱建物は、鎌倉時代のものである。同時期に、この地で活躍した山北相良氏と大いに関係があらう。

B・C・D区は、A区の南東側に細長く延びる調査区で、面積は約50㎡。幅1.5m、長さ28mで、畦畔によって三分され、東側に向かって段上りの地形となる。特筆すべき遺構に、B区とC区を跨ぐ水溜め遺構がある。大林地区の開墾と関係が深く、水田区域に用水を供給するために掘られた溜池である。集落から吐き出される雨水を溜め込んだために、多量の遺物が流れ込んでいる。多量に出土した青磁から、遺構の年代は、12～13世紀代と推定される。遺構は確認できなかったが、大林地区では、隈部氏の活躍もあり引き継いで戦国時代における集落の展開も確実である15世紀代の青磁も出土している。さらに、奈良・平安時代の集落も存在した。この時期の土師器(壺・甕)が出土している。集落は、古代から戦国時代まで、継続して近世を迎えた。

出土遺物の青磁は、川西地区に所在する若宮城跡と時代が見合う。この城跡は、考古学所見と金石文の存在から、鎌倉時代の築城と見なされ、県内で最古クラスの丘城として位置付けられている。この時期、相良氏一族の山北相良氏が、町域の西側一帯で勢力を張っていたが、今回の発見で、東側地域(大林地区)まで拡大することが考古学的に証明された。隈部氏以前の古い勢力を知る上で、貴重な出土遺物である。

この時期、各地で、開発領主の開田作業が盛んであった。大林地区でも、山北相良氏の手によって、盛んに丘陵斜面地域の水田化が計られたことが分かる。町内で最も低地の内田川流域には、古代の条里制が残っており、両者の時期的な差異が興味深い。当然のことながら、開発の手順は、低地から丘陵地へと推移している。

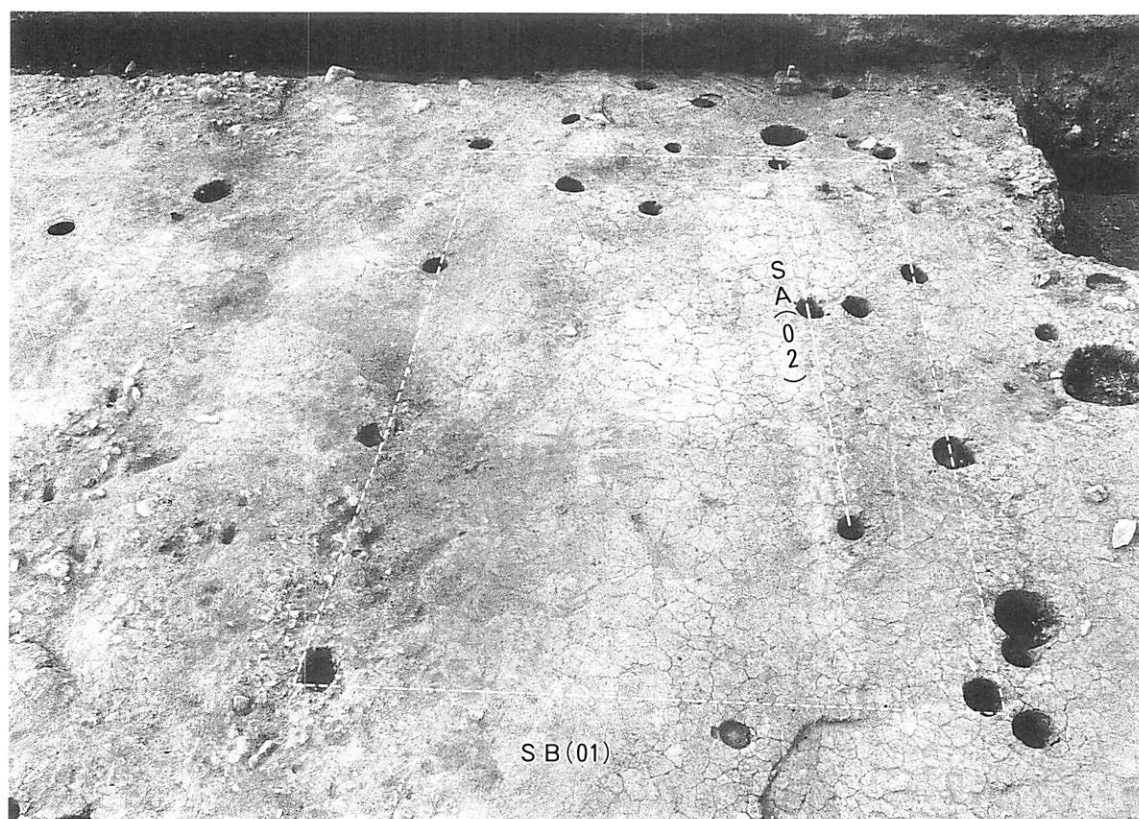
溜め池が掘られた理由は、明解である。初田川は、丘陵斜面のほぼ真中を流れているために、川より上部域の水田には、用水を供給できないからである。溜池は、必然的に不可欠なものとなる。生産力を高めるために、集落ぎりぎりまで、開田されている。

圃場整備事業に伴う発掘調査では、整備区域の用途によって、調査面積が限定されることが多い。特に、今回のB・C・D区に見るように、水路部分は、細長い調査区となり、遺構を検出した場合でも、性格の解明が困難なことが多い。当該の溜池遺構についても、存在が確かめられただけで、それ以上の論の展開はできなかった。

写真図版



図版1 A調査区・S I(01) 南→北



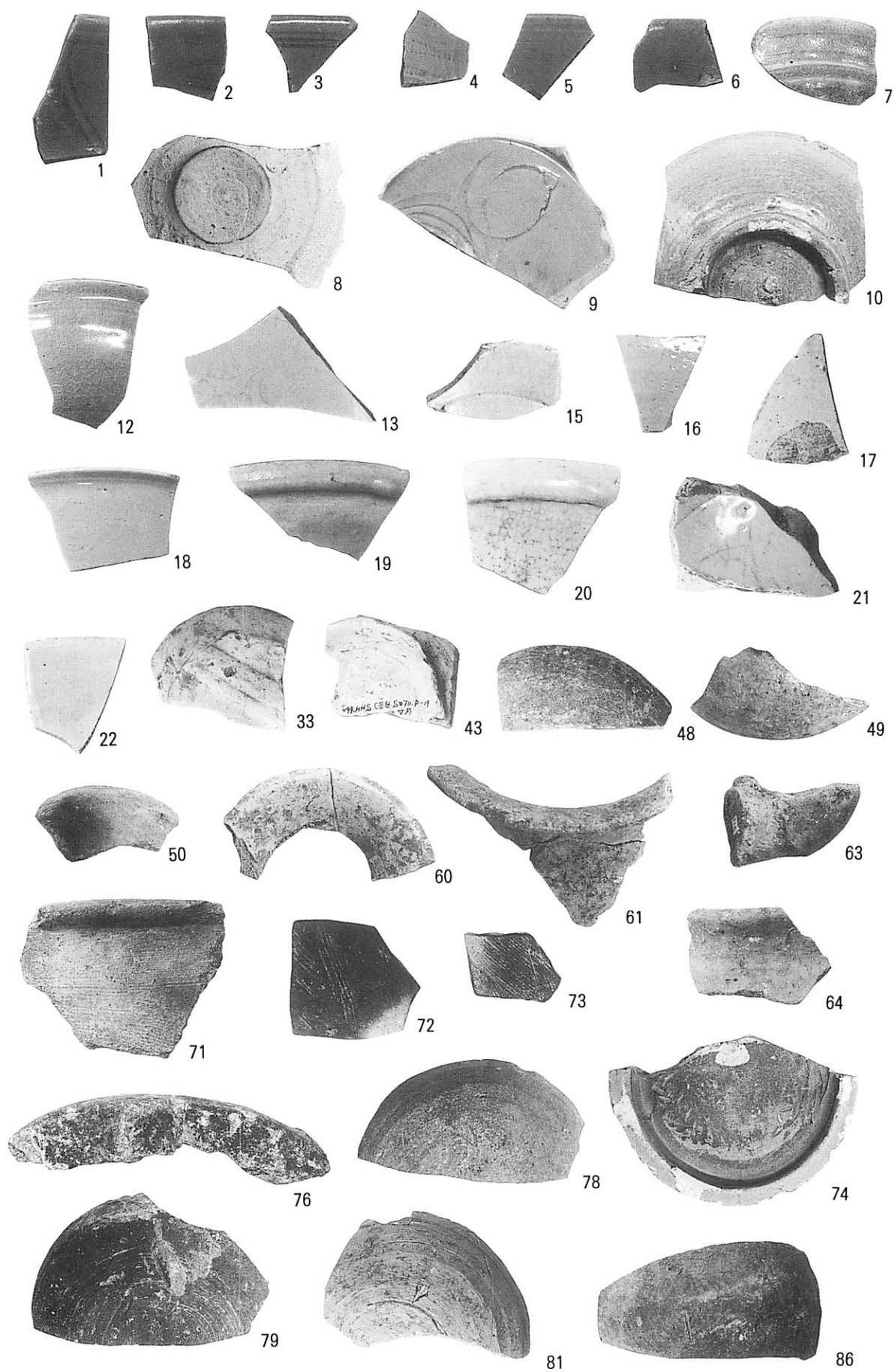
図版2 A調査区・S B(01)・S A(02) 東→西



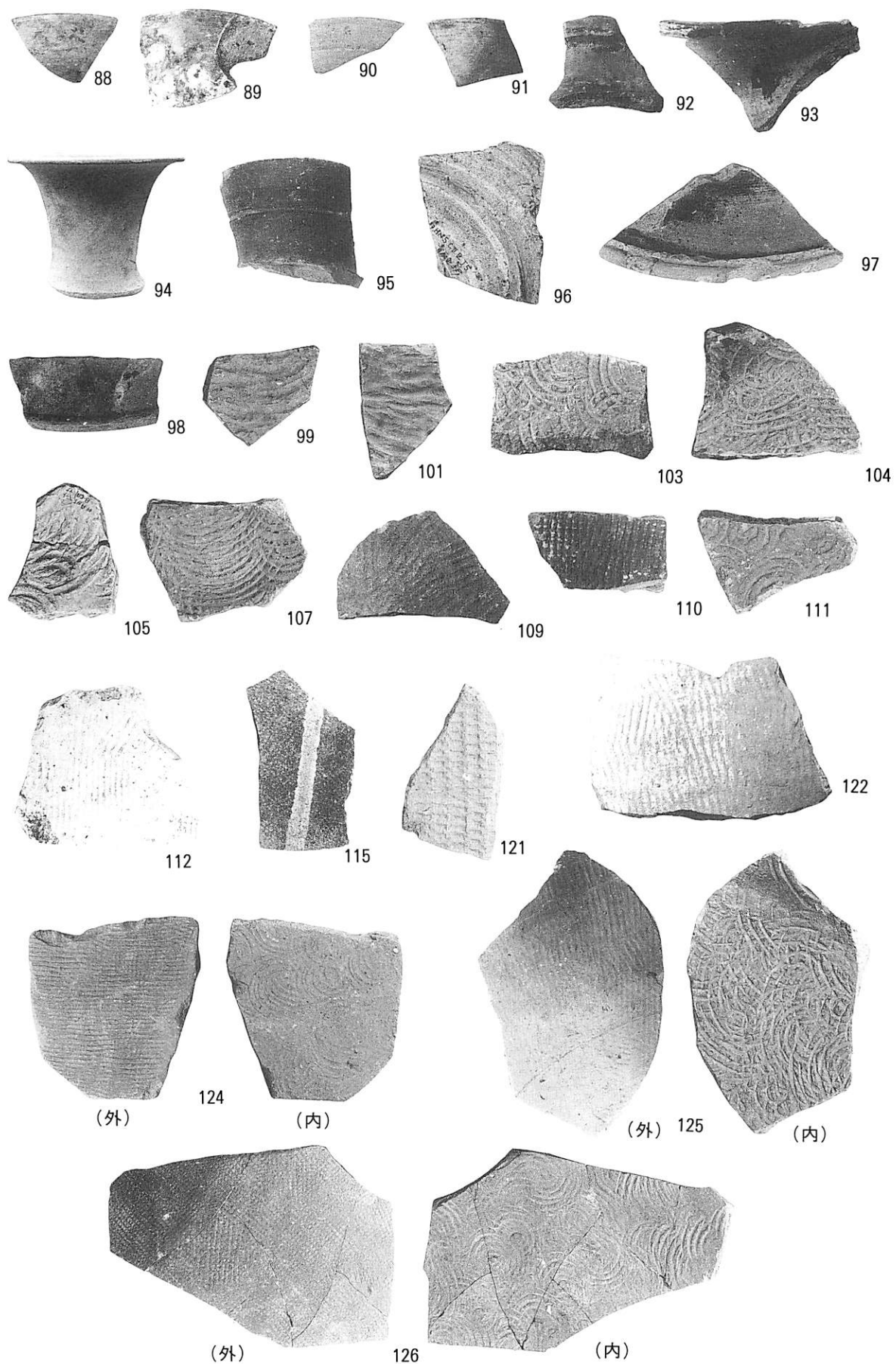
図版3 C調査区・水溜め遺構
南東→北西



図版4 C調査区・t-u土層断面 北西→南東



図版 5 出土遺物



图版 6 出土遺物

報 告 書 抄 録

書 名	樋ノ口遺跡
シリーズ名	菊鹿町文化財調査報告 第5集
編 著 者 名	水 上 仁
編 集 機 関	熊本県鹿本郡菊鹿町教育委員会
所 在 地	熊本県鹿本郡菊鹿町大字下内田165
発行年月日	1999年 3 月31日

所収遺跡名	樋ノ口遺跡
所 在 地	熊本県鹿本郡菊鹿町大字松尾字樋ノ口
調 査 期 間	1999年1月4日 ～ 1999年3月3日
調 査 原 因	大林地区・圃場整備事業に伴う試掘調査により、確認。
調 査 面 積	約550m ² （現況：畑地）
主 な 遺 構	A 調査区 * 竪穴式住居址 3 基 （7世紀代） * 溝状遺構 2 条 * 掘立柱建物址 1 棟 * 柵列 2 列 * 土壇 4 基 * 柱穴 多数 B・C調査区 水溜め遺構 1 基 （遺物多数出土）

菊鹿町文化財調査報告 第5集

樋ノ口遺跡

平成11年 3 月31日

〔発行〕 菊鹿町教育委員会

〒861-0406 熊本県鹿本郡菊鹿町大字下内田165

☎0968-48-3115

〔印刷〕 ㈱大和印刷所

〒862-0931 熊本県熊本市戸島町920-11

☎096-380-0303

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『菊鹿町文化財調査報告第5集 樋ノ口遺跡』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成17年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名：菊鹿町文化財調査報告第5集 樋ノ口遺跡

発行：山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話：0968-43-1651

URL：<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2025 年 7 月 7 日